

〈論説〉

## 三瀬諸淵の「失われた」ソクラテス論の迷宮・私論(二)

— 刑死と不知と「無知の知」文献史からの攷究 —

渡邊 雅弘

【戸塚七郎先生の御霊に捧げる】

目次

1. 誤解の王国—虚実皮膜のはざま
2. ソクラテス論前篇手稿(1)—経国済民 (以上、前号)
3. ソクラテス論前篇手稿(2)—刑死 (本号)
4. ソクラテス論後篇手稿(1)—哲学語釈
5. ソクラテス論後篇手稿(2)—不知論
6. 行動する知性—和製ソフィストあるいはお雇い蘭医学者

[\*本号掉尾に前号分の正誤表及び補正、文献追加を附載する。]

### 3. ソクラテス論前篇手稿(2)—刑死

今なお住谷悦治の「忘れられた思想家」三瀬諸淵「発見」の功績と紹介、研究諸論考、即ち大半が散佚の「第一次資料に基づいた、そういう点では非常にオリジナリティのある論文」を凌駕する水準の諸淵研究はない。<sup>(33)</sup> それどころか、長井石峰の文献無批判の、「例によって」の顕彰諸淵伝、及び諸淵「発掘」と遺稿見分の先駆を自負するプロレタリア作家・藤森成吉の評伝・小説を描いて、傾向性を帯びた住谷の諸淵研究の二次文献自体がいまや、第一級資料となっている。それゆえ、「比喩を借りて言えば、・・・歪んだ画像を映し出す映写機やレンズそのものの吟味」が不可欠となる。「案内書」<sup>チチエローネ</sup>の方向の歪みが問題化する所以である。

「赤化教授」住谷は、自己形成した「ロマン主義、理想主義、人道主義」の倫理的生活態度を貫き、文学や芸術に、殊に人物の伝記への愛好深く、象牙の

塔アカデミズム講壇経済学と市井のジャーナリズムの一方に踞踏を潔しとしない、両刀使いの「公的アウトサイダー」であった。言論・宗教弾圧のあった戦前の「冬の時代」に、「執筆・刊行・実践活動をとおして「抵抗」し、書きえざる時期には「沈黙」のうちに、生きぬいた誠実な、「近現代のいわゆる左翼的知識人の最良の経済・社会ジャーナリズム活動をみる」(傍点、原文)<sup>(34)</sup>と評されたからである。戦後、住谷の「ファシズムに抗して守りつづけた学問の自由」は絶賛されている。こうした、戦前であればマルクス主義かウェーバー社会学研究に特化されかねない「社会学者」を志しながら、筆力旺盛な住谷は同志社大学法学部を追放後、「ある意味で学界への希望を断った」<sup>(35)</sup> 暫時の失意と諦観の下、比較的平穏な松山高商での教職生活に専念した。諸淵末裔の三瀬彦之進翁との交流と長井石峰の諸淵伝を「唯一の指針」として、「本当に生き甲斐ともいえるほどに三瀬諸淵の生涯に魅せられ、その研究に没頭」(傍点、筆者)したと、当時を繰り返し回想している。人物の思想と行動、事績が一体で結晶化する伝記を活用して、非実証的であれ、「作品よりも作者を、作者以上に人間の理解」に肉薄する、文学批評の手法が採られた。偽善、欺瞞なき志操高潔な、信條と緊張ある生への関心が、博学多識以上に、苛烈な求道としてのその学問の初心だったと言えよう。

しかし、この書きえざるはずの「沈黙と抵抗」の松山高商時代にも、住谷は筆を折るどころか、むしろ初心とその「世の不條理と闘う(反骨)精神」<sup>(36)</sup>に背馳するような学術報告・論考・著書を頻繁に公刊している。戦後、住谷は「ファシズムに抗して守りつづけた学問の自由」を、「沈黙と抵抗」即ち「(叔父)天来の雅号である「黙庵」のように、沈黙〔言論弾圧〕の中に深い社会〔抑圧するもの、社会悪〕への抵抗を・・・自らの信念によって鍛え上げ」た、と評されたはずである。それにもかかわらず、同志社大学追放直前にも「思想善導」の一環として論文「マルクスと國際社會主義運動」が執筆され、いまや『臺灣紀行：東亞・日本の新政治體制と臺灣』(松山高商商經研究會・研究彙報7號、昭和16年。)、昭和12年以降の諸淵論の諸論考とその集成『蘭醫三瀬諸淵傳』(大政翼賛會愛媛縣支部、昭和17年。)に留まらず、『大東亞共榮園植民論』(生活

社、昭和 17 年。)、そして松山高商失職直後ですら、論稿「文化と植民」(尾高豊作編『新文化論講座・第 3 卷』所収、刀江書院、昭和 18 年。)等、大東亜戦争と共榮圈肯定論たる「特殊な」著述が公表されている。叔父・「特異な」住谷天来の神の権威を押し立てる非戦平和論、その教友・内村鑑三の日露非戦論を内に秘めてか、「悦治先生は「こんな [大東亜] 戦争はいつまでも続くはずがない。やがて数年後に敗戦で終ることはまちがいない」と洩らし、「父はひたすら日本が敗ける日々を待ちわびていた」<sup>(37)</sup>と証言される時期の、住谷の仕事である。のみならず、松山高商解職後の住谷は、叔父・天来の個人雑誌『聖化』の弱小ジャーナリズムに範を取り、慎重に「冷たい国家権力」の対質化を避けて、国粹大ジャーナリズム批判に言論活動の軸足を移した。『夕刊・京都新聞』の記者と経営の仕事が、それである。

「獨逸を中心とする歐洲經濟圈、英米を中心とする地球上、廣汎圈的に亘る經濟圈およびソ聯の共產主義國家の影響裡にある經濟圈を眼前に控へて、それらの努力により直接・正面的には除外されてあるかの觀を有てる東亞の地域において、日本の生存とその發展を永遠に確保する生活圏を確立しつつ事變を解決すること、しかも三大經濟圏の確立に一歩先んじて、これを組織することは、世界史的問題であるばかりでなく、現在われわれの與へられた絶對的な歴史的使命であるといはねばならぬ。」(『臺灣紀行』、2 頁。)

「私は昨年 [昭和 16 年] 十一月、盲腸炎を病み、・・・手術を受けて、幸に九死に一生を得たが、大東亜戦争の勅發はその病床において知つた。その時の感動はいまだに新鮮である。」(『大東亜共榮圈植民地論』、「序文」4 頁。)

「東洋の平和を攪亂する米英の禍根を芟除し、大東亜の安定を確立して、世界の平和を招來しよう<sup>(38)</sup>としつつある。われらは必勝の信念を堅持し、この眞に乾坤一擲の大戦争に最後の勝利を確保するまで戦抜き、大東亜新秩序を建設し、更に世界の新秩序と平和に寄與しなければならぬ。」(『大東亜共榮圈植民地論』、「本文」1-2 頁。)

「いま日本が直接その世界史的使命を負擔してゐる大東亜共榮圈の建設こそは、日本國家の逞しき發展力を示すものであり、それは日本民族が如何に道

義的に正しく、かつ文化的に高きものを民族として表現しうるかの指標にもなるものであり、日本民族が世界史上に出現して、如何に力強く自らを生き抜くかの試金石たるものである。それは大東亜の實際上の指導者としての日本が、共榮圏内に如何に高く正しき大東亜新文化を創造しうるかによつて、その世界史的價值が判定せられるものであるといはねばならぬ。従つて「植民」といふことにおける「新文化」の意義こそ、日本民族の當面の、そしてまた永久的の努力の目標として、必ず見失つてはならぬことである。……指導國家の文化建設者が、人間として眞に尊敬するに足る無私純愛の生活態度を以て……文化政策は、共榮圏内の民衆の心に、暗々裡のうちに、深く浸潤し、眞に心を捉へ、融合するものであるが故に、民衆の人生觀・世界觀をつくり上げて、共榮圏の完成を期すため、永久的の力づよさを有つことを考へねばならぬ。」（「文化と植民」、135, 158 頁。）

ところで、住谷の諸淵伝と同年（昭和 17 年）に発表の、内村鑑三の高弟にして法哲学者・三谷隆正の論文「ロマ法學と大東亜法學」（法律時報 10 月號、昭和 17 年。）を戦後、教友・南原繁はこう評した。南原は三谷を「群鷄中の一鶴」と回想する一方で、「戦時中「東亜共同体」理論の行はれた時代にあつて、著者の思惟傾向を示すものとして、興味ある一文ではある。だが……時代の意味を汲むことは哲学者の任務でもあらうけれども、また同時に、哲学者も時代の制約を受けるものであることを示す一例」と難じたのである。（南原繁「後記」【『三谷隆正全集・第 4 卷』所収、岩波書店、昭和 40 年、586 頁。】）三谷は、ローマ法の自然法理念の根拠を、ストア主義の「個人主義と世界主義と合理主義」に求めて、その歴史的制約を指摘しつつこう述べていた。

「植民地王によるラチフンジア的支配が今し大東亜の天地から一掃せられて、大東亜人の支配による大東亜が日本の指導と保護の下に実現されやうとして居るわけである。そのためには大東亜に於ける法制の確立とそれによる生活秩序の安定といふことは、一日もゆるがせにできない重大問題である。指導者日本の法治的責任は言ひやうもなく重大である。従つてまた日本の法学者又は日本法学の責任極めて大である。古代ローマはストア的個人主義と世界主義とに基く

利己主義配分の正義理念を以て、その法治主義的責任の遂行に当つた。然しこの同じ正義理念を以て大東亜の法治に当らうとするのは間違ひである。・・・大東亜共栄圏といふ具体的歴史的な全体者が明瞭に意識せられ、他の歴史的全体者と具体的に対立する今日、ストア的世界主義では大東亜に於ける真の公益の所在を掴むことはできない。・・・然し大東亜といふ理念はもつと具体的にして歴史的に限定せられたる総合概念である。その根柢には具体的な全体的生命の脈動がある。この脈動する生命の活いきした感情を以て抽象的な世界主義に代らしめることが、先づ第一に大切なことではあるまいか。そのためには大東亜固有の人と自然につき文化科学的並に自然科学的に大に智識の増加と充実とを計らねばならぬ。・・・一国の道徳的水準はその国の法律家の水準を以て測ることができるといふ。さうして一国の興と沈むとは一にその国の道徳的水準の高いと低いとにある。強靱にして高邁なる道徳的脊椎骨を持つ國民は決して亡びない。」(『三谷隆正全集・第4巻』、561-63頁。)

住谷の台湾調査報告と大東亜共栄圏植民論は、三木清と昭和研究会の大東亜共栄圏論のごとき、「徒に大言壮語によって快をむさぼる」(田中秀臣)植民地化野望論と一線を画し、「日本人の傲り」を突いたと評される。「帝国主義」と「抽象的な世界主義」、「暗愚なる Chauvinisme」(「神の国と地の国」[全集・第4巻所収、492頁、昭和15年。]、「国際政治原理」[全集・第3巻所収、632頁、昭和18年?。])を非とした法学者・三谷隆正の大東亜法原理秩序論と、逆経済封鎖及び植民地解放を構想する点で、ほぼ同主旨のものである。高田保馬『東亜民族論』(岩波書店、昭和14年。)もまた、諸民族の相互対等を行動原理としつつ、「民族社会学」のアイデンティティを日本回帰に求めている。南原繁の高田批判や住谷批判は知られないが、経済学者・住谷の日本道義論は虚に吠える空言の響きを免れ難い。しかし、三谷隆正は仮に戦後存命だったにせよ、「悔恨共同体」に属す敗戦利得を拒む小林秀雄が言い放ったように、恐らく弁解も「反省」もしなかつたであろう。果たして、この植民論と共通論調の諸淵論に、学問を求道と信じた住谷にも不可避の「時代の制約」、むしろ非権力志向の極限的な「抵抗」を深読みすべきであろうか。住谷は「主義者」の素志を枉げて

政治的圧力に屈し時流に迎合して、宣長が辞世に「朝日ににほふ山櫻」と詠んだ「大和ごころ」に回帰する尊皇開国主義の草莽の士・諸淵論を以て、弁明する自画像を「偽装」しなかったか。この微妙な住谷の「転向」弁明の可能性は、私淑した師・河上肇解釈とともに、第一級資料たる諸淵論評価に直結する問題として一考を要すると思われる。後世の住谷の現在と自己を、幕末明治初期を生きた諸淵のそれに投影する言説は、不偏の「没価値」的歴史研究の域を超えた、「戦術的」な牽強付会なしとしないからである。

「私〔住谷〕はここに三瀬諸淵傳を書くに當つて、ただ漫然と復古的、國粹的精神を説いたり、文獻考證を事として獨り高しとする意圖はない。できるだけ正しき歴史觀、社會觀を基礎として、幕末明治における三瀬諸淵を眺めやうとするもので、それは過去への凝視であるが、同時に切實な、現實の私たちの問題と關係あるものとして取り扱ふ」。(住谷『蘭醫三瀬諸淵傳』、前掲書、1頁。)

「人物の歴史的価値〔進歩的文化人〕という観点から、ある個人が歴史の流れに阻止的だったか、促進的であったか、歴史の車輪を逆に廻す事に終始したか、前進への努力を注いだかに人物批判の価値を求め・・・〔その批評は〕歴史によって批判されることを俟つのみである」。(同『ラーネッド博士伝一人と思想』、前掲書、153頁。)

しかし、この批評の精神は、批評がもとより、ありうべき実像の「誤解 (= 解釈)」、さもなくば「解釈の解釈」に留まるゆえの、不可避の制約と傾向文学性を排除できない。住谷が諸淵を相似形として「自己を語る」告白批評、あるいは重ね合わされる alter ego の形象化、つまりは弁明される知識人の自画像たる可能性を回避できないと思われる。むしろ、一方では辛辣な冷笑や皮肉を交えた人物批評を時に敢えてした住谷が、他方では強烈な親和力で「発見」した諸淵や河上肇、D.W. ラーネッドに私淑したがゆえに、各々に自画像を仮託する「公的アウトサイダー」の二重形象化を行っていないか。わけても、ラーネッドを除いて、「アウトサイダー」の世界史的原像・ソクラテスの刑死を一筋の通奏低音、あるいは一掬の網として、それぞれの入牢、投獄、特高による

拷問の屈辱を感情移入しつつ、諸淵及び河上肇、住谷自身の生と思想遍歴の軌跡は、むしろ三重形象化されたと言えないか。逆に、「自己を語る」告白批評以外に、住谷の手法は、思想・行動を批評にまで昇華し得る方法をもたなかったと思われる。例えば、住谷は、「右手に聖書、左手に経済学」（留岡幸助）という「信仰に支えられた人間の学としての経済学」者・ラーネッド伝への長幸男の書評に、私信で深謝したという。長の書評は、「高き理想と簡素な生活」（ワーズワース）に終始して、「真正の信仰と真正の経済学」の統合を模索した、「人間のこの世の業にたいしてとるべき姿勢についてのハンプルなほとんど美しいといってよい【ラ博士の】告白」に、むしろ住谷自身の信條と、自己形象化を読み取ったからである。<sup>(38)</sup>「作品をダシにして自分を語る」にせよ、「自分をダシにして作品を語る」にせよ、作品や作者「以上に人間理解」に進む、求道（＝学問）に遍歴する批評の精神が看取されよう。

同時に、住谷のこうした多重形象化の手法には、相關する内実精神の特徴が認められる。「ロマン主義、理想主義、人道主義」の倫理的生活態度<sup>(39)</sup>の三原則は、諸論考に頻出する、「特殊」、「良心（的進歩的知識人）」、「中間人」・「中間思想」の言句に集約されよう。住谷は、それぞれの「崎嶇たる思想・行動の軌跡」（長幸男）を重ね合わせて跡づけるに際して、両義に引き裂かれる思想信条の「二つの真理」あるいは「二つの正しさ」の相關・緊張・相剋が統合・克服へと至る彷徨と桎梏の「中間状態」の有無に、思想家の「特殊な」面目と真摯、「良心」と誠実を注視している。この二者択一や折衷、便宜的な両刀使いを許さない住谷の批評の視座は、生の深い確信に裏打ちされた、「義務の葛藤」という古くて新しい倫理問題でもある。かつてアウグスティヌスは「地の国（盗賊の国）」と「神の国」の相反を、パスカルは「偉大かつ悲惨」な混沌たる人間の一義の意味付けを退け、「繊細なる精神」の相剋と神への「賭け」を信仰告白した。A・D・リンゼイもまたピューリタニズムにおける社会的責務と個人の自律的自由の「二つの倫理の衝突」を論断した。類例は枚挙に暇がない。人間の「中間性」・「中間者」としての存在規定は何より住谷自身の思想遍歴と苦闘の意識化、論理化にはかならなかったであろう。「個人の良心」と「公の

福祉」の衝突と和解し難い対立は、ヘーゲルが喝破したように、もとより前5世紀のソフォクレスの悲劇『アンティゴネー』における親族の埋葬をめぐる「人間の法」と「神々の掟」の対峙する古典的テーマである。それはまず、アウグスティヌス以前、既にアイスキュロス悲劇三部作の血塗られた親族殺戮と、悲劇的精神による宥和のポリス誕生のテーマであった。次に、そもそも諸淵が論じた『弁明』は、墮落した「鉄の時代」（ヘシオドス）に跋扈する政治的党派抗争と欲望民主主義の「豚の国」アテナイの「猛獣の哲学」に対峙し、絶えず「覚醒」を促す「虻」ソクラテスの架空の「国法」に殉ずる刑死の契機となった。プラトン描く「初期対話篇」のソクラテスは、屹立する神の先知を前にした人間の「不知」、即ち「知の盲目」あるいは「知の悲劇」に立脚して、葛藤と相反、定義不能に帰着する「概念の相対性」を衝いた点で、狂おしく反社会的である。

しかし、戦前吉野作造創設の「新人會」に属した、この反骨気鋭の「左翼教授」住谷は、辛酸を舐めつつ思想遍歴する「苦の世界」で、「一生に二生を生きる」苦患が深化する“et in Arcadia ego”の飽和を満喫することとなる。二兎を追うその中間状態論という「観想的生活」追求の直接の思想系譜の底には、住谷天来・内村鑑三・河上肇の「倒木更新」が刻印されている。住谷に洗礼を施した叔父にして「特異な」カーライル・ラスキン・ダンテ研究者・個人伝道者・廃娼運動の平和主義者・天来と、同じ上州人で盟友の独立伝道の無教会主義キリスト者にして「近代日本最大のアウトサイダー」内村、そして直接師事した「求道」のマルクス主義経済学者・河上への私淑と継承の初心が認められよう。天来と内村はソクラテス、プラトンについても批評している。<sup>(40)</sup>

まず、天来のキリスト教倫理と、天来私淑のラスキン流経済学（＝生命の学）との対比と接続、内村鑑三の所謂「武士道的キリスト教」、即ち「二つのJ（Jesus, Japan）」という「多中心（poly-centric）」問題、換言すれば所謂「不敬事件」に象徴される、キリスト信仰と、「東洋倫理の素養」、内に抜き難く根付いた儒教的「敬天」の思想、あるいは国学伝来の「大和ごころ」、尊皇、愛国心との矛盾や暗転、融和の感化が挙げられよう。<sup>(41)</sup> 住谷の先人三人はいずれも一徹に「背教」も「転向」もしなかった。



実際、住谷は「日本的という意味で」「特殊なマルクス主義者」・「非「転向」のマルクス主義者、「『社会科学的真理と宗教的真理との統一』に苦しんだ河上肇の真の後継者」<sup>(42)</sup>と目された。「河上的後退線の最後のぎりぎり決着の拠点」(住谷)、宗教に代替可能な「道」の人生観・世界観の、その共鳴した「求道としてのマルクス主義経済学」の特質は、住谷以前に既に指摘されていた。(古田光『河上肇』、東京大学出版会、1959年。)それにもかかわらず、住谷はこの日本的「特殊なマルクス主義者」(河上肇)像の描出、つまり比類ないと自負する「わたくしの河上肇像」(傍点、筆者)の別袂に勤しんだ。住谷の文献参照の当否は判然としないが、住谷は河上肇の縁者・河上徹太郎の連載評論「日本のアウトサイダー—河上肇の章」(中央公論73巻13号、昭和33年。翌昭和34年、『日本のアウトサイダー』所収、中央公論社刊。)を知らなかっただろうか。河上徹太郎は、出獄に際して「転向」を表明した河上肇に、むしろ佐野学や鍋山貞親の比較的単線の「転向」とは異質の「純粋な「非転向」者」、「人格と学問の分離の対世間的表現」を見届ける逆説を展開した。「回光返照」と自称した神秘的経験に立つ河上肇の「特殊な」マルクス主義は、無産政党論「山川イズム」と、それを「組合理論」と批判し、無産者政治運動から非マルクス主義的要素の「分離」と、前衛党的なマルクス主義革命意識の鼓吹による非法無産政党的再「結合」を提唱した、ルカーチ受け売りの「福本イズム」の双方から指弾された。のみならず、上部構造の下部構造への一方的従属を主張し、論争する櫛田民蔵の公式的唯物史観絶対主義の前にも劣勢に立たされた。いずれのイズムも「コップ中の嵐」と言うべく、コミンテルンの権威の前に失墜するには、まだ暫しの間があった。住谷はなお、社会学者・高田保馬が後に京大解職理由ともなる日本回帰の『東亞民族論』(岩波書店、昭和14年。)を上梓して、「利益社会化」を論拠に大東亜戦争の不可避性、必然性、肯定論を正当化するばかりか、一宗教的信仰あるいは「空想」としてのマルクス主義批判と利潤・利子論で河上肇を窮地に追い込んだ論争も知悉していたであろう。しかし、「彼[河上肇]の学者的良心は、学問の真理にそれ自体で自立性を与え、それを自分の存在から突っ離すことによって、自分の意思を純潔にし、以て身

のあかしを立てようとした。」(河上徹太郎『日本のアウトサイダー』、同書、124-25頁。)個々に唯一絶対を発見した「純粹人」の、本来「転向」を許さない心情倫理の「双中心主義」を、河上徹太郎は逆説法で捉え、非転向の保証する「出獄後の澄んだ、雅致ある心境」担保への河上肇の帰趨を導き出している。一方、住谷はそれを、共存しつつ折衷を拒む「良心的」「中間」、つまり絶対と純粹に距離を置きその共存に耐える相対的「迷宮」、あるいは「社会科学的真理と宗教的真理との統一」の論理破綻する、神秘的経験の「謎」と評した。従って、住谷河上肇論の自負は、同じく私的精神史の形象化批評によって、河上徹太郎の河上肇「非転向」論が既に先取りしていたと言えよう。<sup>(43)</sup>ともあれ、変容し流転する内憂外患の幕末明治初期に、海嘯に呑まれる桐一葉さながら、波瀾万丈の「独特な生き方をした」諸淵に共振した住谷が、河上肇論に先行する諸淵論で、既に共通論法を以て「特殊日本的」尊皇開国主義の解釈を展開していた消息は、後述のとおりである。「煩悶」と「社会的変革」に恋する住谷の批評方法は一貫して、むしろ深化も変容もしなかった。

かくて、住谷のキリスト信仰と「自身を深掘りする」求道の遍歴は、若き日の「HebrewismとHellenism」の対立をめぐる懊悩を終生直視して、「マルキシズム唯物論弁証法とプロテスタント・キリスト教倫理」の背反の克服、統合の課題を設定したと言えよう。<sup>(44)</sup>しかし、その課題が「懊悩」と誇示されるほど意識的・脱自的であれば、狂気に似た先鋭的な思想的苦闘の貫徹があったか否かは、また別問題である。ただ、住谷に、同志社創設の新島襄愛弟子の哲学者・大西祝の早熟な博愛主義、非マルクス主義的「社会主義の必要」論の直接の影響は認められない。「予輩は現社会に社会主義を唱うるの必要あることに目を覆う能わず。而して宗教は由来社会主義と親しかるべき筈のものなりと考う予輩は宗教を説く者が今一層大胆に平等主義を主張せむことを希わずんばあらず。」(「社会主義の必要」、六合雑誌191号、明治29年。傍点、筆者。小坂国継編『大西祝選集Ⅱ—評論篇』所収、岩波文庫、2014年。)

住谷は、最晩年に取り組んだ一千頁余の大著『ラーネッド博士伝』(未来社、1973年。)を以て、この生涯をかけた難題の最終的結論に到達した。自由主義

経済学者から保護貿易論者へと転じたラーネットの足跡を巨細に辿りながら、自己の学問的営為の歴史化と思想や精神の形象化を重ね合わせて、経済合理性の枠内での社会改良と人格陶冶の可能性を論定している。「非合理的」宗教や神秘的体験の秘奥での謎めいた解消でなく、西欧文明や輸入学問が人類の普遍的正道、世界規準との信念ゆえに、その移入に抗する叛意を反動と難ずる近代主義に依拠して、「合理的な近代理性」への信頼と、欲望の模倣と貨幣の力を信じる計算高い「合理主義的精神の構築」による統合が論結された。従って、住谷の諸淵論及び河上肇論は、いまだこの帰結への途上にあった。後述するように、住谷が両者の「中間人」の「懊悩」を別抉しつつ、その克服を諸淵の政策提言を超える政治的・社会的実践と、他者の容喙し得ない河上の神秘的体験に融解して、非合理的な「言句なき不立文字の境地」という解けない「謎」のままに放置したのは、けだしそのためである。『自叙伝』の河上肇自身による超克の論理がもとより破綻しているというのである。そもそもこの時期の住谷自身が、出口の見えない識域で、バスカルを俟つまでもなく「不安懊悩が最も確実な気晴らし」(A・フランス)の文学趣味的な「中間思想」を彷徨する、「中間人」の境涯にあったと言えよう。

さて、諸淵の肖像に重ね合わされる住谷悦治の前半生は、以下のとおりである。「一九二一(大正一二)年学窓を出るときに、父〔悦治〕はいわゆる「思想」の問題で一生を決める選択の際に立たされ、わが身にふりかかるであろう災難や両親のこと、家の問題、郷土の人たちの期待などに苦悩したあげく、遂に社会主義の側に立つことを決断しました。それには尊敬する叔父住谷天来の非戦平和主義、恩師吉野作造の民本主義と新人会の大正デモクラシー、さらに決定的には河上肇のマルクス主義への接近を示す個人雑誌『社会問題研究』からの影響が巨きかった……。社会主義者になることは、戦前の天皇制のもとでは、幕藩体制下でキリシタンであることを告白するくらいに覚悟のいることでした。」(傍点、ルビ、ともに原文)<sup>(45)</sup>

その結果、住谷は同志社大学教授時の昭和8年〔1933〕7月、筆禍事件から治安維持法違反嫌疑で検挙され特高の拷問を体験した。そして起訴後、処

分保留のまま「思想犯保護観察法」で半年「監視」下に置かれ、「学問研究に没頭し教員としての職責を尽くしていた」松山高商でも、昭和12年[1937]、再度「赤化教授」として失職に追い込まれた。「むき出しの暴力に住谷は屈したことになるが、それは普通の日常から暴力が支配する非日常への劇的な転換」にほかならなかった。<sup>(46)</sup> 同年成立の「思想犯保護観察法」は、「左翼」知識人に「転向」を促す事後訓育の法規であった。当時、地下活動に身を投じた実妹が獄死する、コスモポリタンの洋学派エピキュリアン林達夫は「声低く語り」、「嫌悪に充ち満ちた古い日本」の片隅で自宅の作庭に心肝を砕いていた。「おい、地獄さ行ぐんだで！」(『蟹工船』)と書いた小林多喜二も獄死し、特権的な知識占有の打破を宣言する「讀書子に寄す—岩波文庫發刊に際して」を草し、ウェーバー「没価値論」の訳語を提案して、なおマルキシズムに傾倒した三木清も、治安維持法違反で検挙され、諸淵自身が獄中で惨苦悶絶した「牢死病」と同じく、獄房での疥癬病で悶死した。それに対して、マルクス主義憲法学者・鈴木安藏は、大正15年[1926]、治安維持法違反で検挙第1号禁固2年の服役後、吉野作造の知遇を得て『明治文化研究』に携わり、のち尾佐竹猛「庇護下」で衆議院憲政史編纂委員に推薦されるや、植木枝盛の私擬憲法草案を発掘した。筆を断つどころか、住谷・諸淵伝刊行の前年、『日本憲法史概説』(中央公論社、昭和16年。)の「序」の日付を「皇紀2600年新秋宵」と記しただけではない。論文「翼賛議會とは何か」(『改造』2月號、昭和16年。)は夙に知られていた。大政翼賛体制を積極的に正当化する一方で、戦後日本国憲法の国民主権規定の成文化にも関与したとされる、「二つの顔」(立花隆)を持つ。鈴木は確かに戦後、『憲法学三十年』(評論社、昭和42年。)で自己批判し、憲法理論研究会を創設して、憲法改悪阻止各界連絡会議(憲法会議)初代会長に就いた。住谷に「二つの顔」はなかったか。戦前戦後の住谷の言論活動について、田中秀臣はこう評した。<sup>(47)</sup>

「[叔父] 天来は官憲に弾圧され、沈黙を余儀なくされ、終戦を見る間なく孤独のうちに憤死する。この天来から直接に受け継いだ住谷の精神性を端的に言い表せば、組織や社会の主流の精神構造とは一線を画す、いわば「公的

なアウトサイダー」と表現するべきものだった。「公的」と形容したのは、彼は決して社会から隔離した孤高の存在ではなかったからである。彼は社会的に白眼視された時期でさえ、内的な世界に閉じこもることなく、積極的に社会への関与を求め、自らの意見を公にした。住谷のこのような積極的なジャーナリズム活動は、彼の心の奥に蓄えられた社会の非道への反抗心に基づくものである。住谷もまた叔父天来と同様にいくたびかの言論弾圧に直面した。住谷の社会への憤怒の心は、孤独のうちに死んだ天来の強制された沈黙のあり方と同じものであった。天来も住谷も言論活動に不利な状況に甘んじて沈黙を選んだのではない。可能な限りの発言を求めた末の沈黙であった。まさに両者には沈黙（「黙」）の中に激しい社会悪への抵抗のあり方を見るところで共通するものであった。彼はそのような性向を、大学アカデミズムの場を実質上追放された戦前・戦後の多様なジャーナリズム活動でより一層確かなものとした。」

しかし、住谷が旧制中学以来晩年まで綴った、従来未公開の21冊の日記を含む諸資料を精査した本庄豊によれば、「河上肇や小林多喜二は住谷にとって「向こう側の人」であった。治安維持法違反で逮捕・拘束される「向こう側の人」と自分は違うという意識を持ちつつ、[同志社]大学で講義し、政治演説を行い、雑誌や新聞に論文を寄せ、ラジオにも出演していた。その住谷を「向こう側の人」と同じ場所に追いやったのが特高警察である。住谷の細心の注意も、学問的信念も、特高の暴力と新聞報道の洪水の前では霧散してしまう。ジャーナリストでもあった住谷が一番自覚したのはそのことであった。住谷は嘘の調書を書き、実名は新聞に報道されなかった。」<sup>(48)</sup> 確かに政治的野心のない住谷は「象牙の塔」に立て籠もり、制約はあってもマルクス主義研究を続ける大学の自治・学問の自由を享受しつつ、非合法地下組織には周到にかかわらず、地下運動にも距離を置いた。社会運動に不関与の用心深い姿勢は、「住谷の一貫した反体制的でなおかつ「大衆」に訴える社会参加型のジャーナリズムのあり方」（田中秀臣）に自重と「良心的知識人」の特有の文学的苦悩を齎したにせよ、陸続と刊行される著書の印税と原稿料

はときに大学の給与を軽く凌駕することもあった。「26本の論文量産」に追われる年すらあったという。

一方、カント以降のドイツ観念論哲学の崇拝に追随して受容された、洋「学」としてのマルクス主義は過去の絶対化と設計主義の革命幻想に立つ歴史決定論、つまり「(擬似)科学的社会主義」として神話化された。なお一層高い関心を呼んだレーニンの共産主義前衛党理論は、対極にある過去の必然悪を撲滅する絶対の正義を大義として、非日常的な暴力革命を鼓吹した。現実の殺戮が恒常化し、ロマノフ王家はその一子まで処刑された。従って、「大いに皇基を振起すべし」と諸淵伝に書き付けた、この「中間思想」を抱く「進歩的知識人」を、住谷旧知の非妥協的マルクス主義ジャーナリスト・戸坂潤が看過しなかったならば、「修正主義者」どころか、その日和見主義が指弾されたであろう。応召を免れた二度目の兵役時、住谷は精神的打撃から脱毛症に陥ったという。検挙後、「処分保留、六ヶ月監視」処分下に置かれた住谷は、「本当に生き甲斐ともいえるほどに三瀬諸淵の生涯に魅せられ」、この「純粹の〔文献学的〕歴史研究への没頭」(傍点、筆者)を敢えてした。しかし、それは戸坂にすれば、変節、転向、退却、つまりヘーゲルのヘレニズム哲学評の響みに倣えば、「精神にとっては墮落を意味したこの内面、この自己へのひきこもり」、あるいはプチ・ブルジョア文献解釈学以外ではないであろう。「文献学は・・・哲学化されることによって却って戯画化される。逆に哲学は、文献学化することによって非科学化する。文献学は文献学として無論少しも誤っていない。だが世界の現下のアクチュアリティは決して文献学の対象ではないのだ。だから、文献学を何か特別な主賓として待遇しなければならぬと考える哲学は、必ず何かこの現実＝アクチュアリティを恐れなければならぬ理由を有った哲学に違いない。----そしてアクチュアリティが問題にならぬ時、どんな「歴史」も意味がない」。(傍点、原文)<sup>(49)</sup>住谷の諸淵研究がその目こぼしに浴した、戸坂の「文献学」哲学批判は、A・ヴォルフやA・パーク流の精緻浩瀚な記念碑的19世紀ドイツ古典文献学を対象としていない。先鋭化する戸坂は、書齋派や「象牙の塔」で横行する、

非実践的机上の空想「学」・マルクス主義の「設計」解釈や些末な文献考証へのスコラ学的「転落哲学」を標的とした。その後、戸坂は獄死した。

「軍及文部省教學局長」による松山高商追放直前、住谷は諸淵の全遺品・文献の組織的整理を企て、既に目録の作成を終えていた。「その頃、わたしの一学究として僅かに為しえることは純粹の歴史的研究に没頭することであった。たまさか松山高商の教授会が催してくれた送別会が大洲町であった。そのさい大洲町出身という「三瀬諸淵の墓」を見学し、同志社大学教授時代にたまたま読んだ、『高島嘉右衛門自叙伝』に出てくる素晴らしい人物三瀬周三が三瀬諸淵であることを、このとき遅れ馳せながら始めて知った。高島嘉右衛門が幕末明治の経済史上特別な意義を有つ人物であることはわれわれ幕末・明治経済史研究者の夙に知るところであった。奇しくも三瀬諸淵（周三）は佃島監獄時代における高島嘉右衛門の心の友となった人物であり両雄相照らした挿話があった。さて、私はその時『高島嘉右衛門自叙伝』を再読して三瀬諸淵なる人物に初めて関心を持つに至った。歴史における出会いであった。」(傍点、原文)<sup>(50)</sup> 経済史学界で「封建論争」と「マニファクチュア論争」が鎬を削った昭和6年[1931]頃、服部之總の高島嘉右衛門に関する教示が、その諸淵研究没入の機縁だったという。

さて、住谷は一方でこの諸淵を「書齋人 (= 非実践的新知識人)」と規定しながら、到底隠逸の懐手する書齋人に収まらない知的稟性の諸淵の、その八面六臂の事績を次の「目星しい」9項目に絞っている。その「朝に廟堂の機密に参与し、夕に獄囚の苦汁をなめた」<sup>(51)</sup> 数奇な苦難の短生涯は、長井石峰の諸淵伝のみならず、藤森成吉の戦前の歴史小説『若き洋学者たち』(日新書院、昭和17年。)及び、戦後の評伝『近代日本の先駆者たち—幕末の洋学』(新日本新書148、新日本出版、昭和47年。)にも二度描かれた。のみならず、企画倒れに終わったとはいえ、住谷の熱望で、その非業の死をめぐる劇的生涯は映画化も検討されたという。

諸淵の公的生涯の大要は、長崎修業と獄囚の時期を別にすれば、次のようである。「三瀬は慶応三年[1867]五月十四日、召されて二条城に登り、徳川慶

喜に調して、大政奉還を進言し、これを内側より指導し、戊辰戦乱のさなか、傷病兵が多く続出したのに際し、大阪病院および医学校の設立に従い、また後に専売特許法の起草や陸海軍軍制改革や監獄制度改革等の立法に参与した人物であり、維新後に伊藤博文はこの効に報い、陸軍軍医総監に推薦しようとする意があったが、名利に恬淡な諸淵はどこまでも純学者として終始せんことを希望し、博文の勧告を辞退し、大阪医学校および病院の勤務に当り、医学生の教育に努めた」。(52)そして、西南戦争のさなか、病歿早世した。住谷は、諸淵早折の遠因を「惨憺たる言語に絶する監獄生活」の後遺症に求めながら、文化的貢献における「先生の意義」と、「白菊の空高く見て微笑めるが如き清高な」人柄の生涯を特筆している。「眞に克く學び、克く努め、孜孜として泰西の新知识の輸入に専念し、実際に日本文化の發展に盡したものである。身を以てした眞の意味における尊皇開國の實踐者」(53)と評した。のみならず、藤森成吉とは異なって、住谷は牢死病(=疥癬)を患い秘かに嗚咽を呑んで獄死を覚悟する諸淵を、従容として刑死する哲人ソクラテスに準えている。「佃島の獄に下さるとき、和蘭のコンシルが窺かに周三に和蘭に身を逃れるやう準備までして勧めたのに對し、日本に生れて日本の國法を逃るるは日本人の爲すべきことにあらずといつて拒絶したことなども、身を以て正義と勇氣を示して毒盃を仰いだギリシアの哲人ソクラテスのことも偲ばれてその凜とした態度に襟を正さざるを得ない。」(54)住谷は長井・諸淵伝を踏襲した。

更に、その9項目の諸淵の事績に加筆点描すれば、以下のごとくである。

- (一) 大政奉還において幕府側を内面的にリードしてゐる點 ---- [慶應2年 [1866]] 攘夷派の薩長同盟が成立し、「幕府・オランダ・フランス」佐幕と「薩長・イギリス」攘夷の対立構図が出来上がる。尊皇・佐幕・倒幕・攘夷・開國の5つの立場群が錯綜する中、「蘭癖大名」第一人者・伊達宗城公は外務事務総督となり、妥協策として公武合体と大政奉還を推進した。宇和島藩出士となった諸淵は、元治元年 [1864] 秋より慶應3年 [1867] 11月まで、宗城公顧問団の筆頭格として、海外の諸事情を説き、忠言を具申した。慶應3年5月14日午刻慶喜公に二條城に招ぜ



られ半年程滞留し、大政奉還とともに明治大帝に登用を推挙された。慶喜公より贈られた公の写真一葉が遺っている。この時、西周は「奥付」として二條城にいた。「その頃幕府の通訳には、明治のジャーナリストとして有名な福地源一郎や民権思想の啓蒙につとめた福沢諭吉がいた。すぐれた人々ではあったが、あの複雑な外交問題、とくに諸外国との通商問題と貨幣取引のような経済問題について、完全に意思がたつたような通訳ができなかったという。それをもどかしがった[再航した]シーボルトは、別室にひかえていた周三をよび、周三はみごとに通訳したという。」(三好「三瀬諸淵」、前掲論文、83頁。)三瀬周三はシーボルトの私設通訳となった。「丁度かういふ時代のさなかへ、老いさらばへたシーボルトが再び日本を訪れてきたのである。/老シーボルトは、文政時代の夢のつづきを三十年後の日本の現実の内でもみたさうとした。/これはまことにいたましい悲劇であった。/昔のかれの弟子の内、たつた一人かれを迎へた高弟二宮敬作は、老いて中風を病んでゐた。それは、文政年間の日本がすでに老い朽ちてかれの前から姿を消してゐたことを物語つてゐた。・・・老シーボルトの學者としての役割はすでに日本になかつたのである。醫者としてもシーボルトはもう年老いてゐた。・・・學問の上で役割のなくなつてゐることはシーボルトも自覺してゐたらしい。そのためかれは、今度の來朝では日本の政治的援助者として、自分の役割を・・・幕府の外交顧問となることに見出した。」(貴司山治「幕末の國學者・科學者—伊豫探史旅行から」(大洲史談會) 温古5號、昭和16年、20-21頁。)

- (二) 開港に關して [イギリス公使] パークスとともに宇和島藩・鹿兒島藩との間に立つて先生が爲したる隠れたる活動と功績 --- 次の (三) に同じ。諸淵は、「宗城の意を體して單身英公使パークスを [大使館代りの] 軍艦に訪れ、その書記アレキサンデル [シーボルトの長男で長崎で周三に日本語を学んだ] と談じ、パークスに會ひ、新政府の外交の未熟を謝し、今後は伊達宗城がこれに當ることを納得せしめ、パークスをして新政府

を強く支持せしめたのみでなく、彼を通じて各國公使をも説かしめ、江戸の大君政府に代つて京都のミカド政府が日本の眞の政治・外交の中樞であることを納得せしめたといふ。・・・眞に隠れたる周三の新政府への協力である」。 (住谷「三瀬諸淵の研究」、前掲論文、446頁。) これを起点に、その後日清・日露戦争と日英同盟に至る日本外交の「基礎」が固められという。

- (三) 備前藩の兵とパークスの水兵との衝突に際して、大阪・兵庫にあつたわが政治・外交の事実上の中樞とパークスとの交渉における危機に際しての先生の (通譯者としての) 隠れたる外交的斡旋 ---- 「パークスは横浜に赴任する六日前に、下関で長州藩の井上馨、木戸孝允 (桂小五郎) らと会見して、倒幕に長州藩を利用する腹を固めていた。本国のイギリスはフランスと利権を争う関係にあつたので、小栗上野介が動かす幕府を見方につけたフランス公使レオン・ロッシュの動きを見ながら、この状況を打破するためにひそかな行動を開始した。パークスは部下のグラバーに手引きさせ、一八六六年 [慶應2年] に自ら鹿児島を訪れて親交し、薩摩藩・長州藩と接近して、倒幕を支援することにした。一方で、倒幕後の利権を確保するため幕府にも近づいて兵庫 (神戸) を開港させることは忘れず、大量の最新鋭兵器をグラバー経由で薩摩藩・長州藩に送り込み、直情径行の下級武士をたきつけた。目論見通り、いざ戊辰戦争が勃発すると、イギリスは中立を装って、他の列強諸国が日本の内戦に介入できないよう立ち回った。そのすべてを仕組んだ外交官こと利権者のジャーディン・マセノン商会代理人がこのパークスであった。戊辰戦争～明治維新とは、この狡猾な国際的戦略を果たす目的のため、「イギリス人の手の中で起こされた暴力クーデター」だったのである。かねてそうした危険な国際事情を知っていた日本人といえ、長崎で中国人との貿易取引を掌握していた唐通詞と、彼らと親交していた高島秋帆のような長崎町年寄だけであった。だが、この幕末に、当時の複雑な国際事情に精通する人間は、まったく日本にいなかった。」 (広瀬隆、前掲

書（下）、411頁。）しかし、諸淵は宗城公の下、卓抜な日本側通訳として、神戸事件、堺事件、パークス襲撃事件等の攘夷排撃事件の事態收拾に向けて、英国公使館のシーボルトの息子・アレクサンドルと人脈を巧みに用いて交渉した。諸淵は英語で通訳したという。

- (四) 戊辰戦傷兵の續出に際しての大阪病院設立の意義・貢献 ---- パークスのお抱え医師ウィリアム・ウィリスは戊辰戦争に際して薩摩藩に雇用されて薩摩藩兵及び官軍のみの野戦病院での治療を指揮して、新政府から絶大な信頼を勝ち得た。しかし、ウィリスには、「死の商人」武器商グラバーと同じく、イギリス人の利権確保を目的とする、「蘭佛を排除する活動家」の偏狭な一面もあった。後に海軍軍医総監となる高木兼寛はこの時、薩摩藩医として、戊辰戦争に参加していた。それに対して、後に初代陸軍軍医総監となる、佐倉藩順天堂の幕臣松本良順は猛烈な戦禍を搔潜ぐって会津藩に向かい、幕府側の続出する戦傷兵の治療にあたった。新政府は官軍賊軍戦傷者の治療に、人材不足から「朝敵」の有能な幕臣医師たちの協力を仰がざるを得ず、明治2年[1869]3月、長崎の蘭医ボードウイン及びその通訳兼秘書として卓抜な医師・薬学者の諸淵を招聘し、造幣局設立を諮問させるとともに、大阪・大福寺に浪花仮病院を開き、医学校を併設し舎密局を開設して、医学伝習の教育を行った。大学少助教に任じられた諸淵は、文典・語学・歴史・法制など従来の多方面の仕事から、この時以来ようやく天職たる医学・薬学の道へと進んだ。臨床や経営には携わず、ボードウインの原病学講義を明快に通訳して、学生仰慕の的だったという。英学の旧師にして、京都で刺客に襲われて重態の兵部大輔・大村益次郎を、懸命に看護して最期を看取ったのも、この病院であった。一方、明治2年、大阪より1ヶ月早く東京には医学所が医学兼病院として発足し、その後大学東校と改称された。佐倉藩順天堂や長崎小島養生所出身の「朝敵」の幕臣医師団が、大阪病院同様、勢揃いした。佐賀藩士・相良知安、福井藩士・岩佐純、越後長岡藩士・長谷川泰など、順天堂門下が結集して、戊辰戦傷兵の治療を契機に、ドイ

ツ医学の導入によって、近代日本の医学・医療・病院制度の礎石が据えられことになる。明治4年〔1871〕、大学東校と大阪病院、開成所を統合した東京医学校（東京大学医学部の前身）開設を受けて、ボードウィンとともに、文部権大助教、文部中助教に任じられた諸淵は、東京へ赴任する。慶應義塾発祥の築地で、妻高〔タカ〕を介して福沢諭吉との交流が始まるのも、この頃である。明治6年〔1873〕、再び諸淵は文部省大助教として、北御堂に再設された大阪医学校兼病院に赴任して、蘭医エルメレンスの講義通訳と医学生教育を行い、その大部な講義録を翻訳刊行した後、大阪病院一等医として再び大阪に戻る。明治10年〔1877〕、「三瀬諸淵と其交友、西南役當時の軍醫、長崎精得館を寄宿舎」（東洋文化協會編『幕末・明治・大正回顧八十年史・第22輯』、東洋文化協會、昭和12年。）として出征している。同年、「牢死病」の後遺症と過労からか、劇症腸カタルで卒然逝去、享年39。若すぎる晩年、諸淵は渡欧して医学界と医療施設を視察しつつ新医学も吸収し、「優秀な外国人医師の招聘をして、東京に大病院と病理研究所」創設の大業を志したが、果たせなかった。それに対して、西南戦争の明治10年〔1877〕、佐野常民・大給恒が日本赤十字社の前身「博愛社」を設立して、敵味方の区別なく傷病兵救護に当たり、明治12年〔1879〕、医を仁術とした「同愛社」を設立する、「幕末任侠医」高松凌雲は戊辰戦争時、函館・五稜郭で榎本軍傷病兵の治療看護に当たっていた。日本赤十字思想の先駆と称される「高松凌雲にとって最も重要な意味をもつのは、徳川慶喜の名代としてパリ万国博覧会に出席する徳川昭武に随行してヨーロッパにおもむき、パリの医学校兼病院である「神の館」で医学を修める機会を得たことで、それなくしては凌雲は単なる一医師として終わったことはまちがいない。渡欧が彼の生き方を左右した」。〔吉村昭『夜明けの雷鳴—医師高松凌雲』、文春文庫、2016年、349頁。〕帰国後、五稜郭の榎本軍に投じて、箱館の野戦病院頭取となった凌雲は、最新の西欧医学で戦傷兵の治療にあたった。諸淵にも期待された新知識の貢献であったであろう。

なお、諸淵はシーボルト再航の長崎遊学中、海軍伝習所に赴任した蘭医ポンペになぜか最新医学を学んだ形跡がない。老シーボルトに遠慮したか。この時、安政4年〔1857〕、長崎養生所の幕府医官・松本良順はポンペに学び、シーボルトの娘伊篤〔イネ〕もまた聴講している。

- (五) 明治三年徒刑圜圍局勤務となつてよりの（先生の）獄制の改善に關する多くの（具體的）貢獻――文久2年〔1862〕、諸淵は突如、佃島に投獄された。素町人に許されない苗字帯刀を犯したとか、櫻痴・福地源一郎と福沢諭吉を凌ぐ通訳の天稟が妬まれたとか、幕府外交の最高機密に關与したとか、理由の判然としない冤罪とされる。諸淵は神経熱と陰惨な「牢死病」と称された疥癬を患つたため、元治元年〔1864〕に再投獄されるまで、大洲藩邸で療養が許された。諸淵は、生き延びて27歳で出獄する慶應元年〔1865〕まで、前後都合4年ほど、過酷な獄中で呻吟した。諸淵が、蘭公使フルベッキ慰問時の逃亡幫助の申し出を、ソクラテス然として固辞したのは、この佃島獄中の事である。「しかし志ある者は如何なる人生社會の場面にあつても必ずこれを活用し、有意義に生きる道を發見するものである。彼は獄中にあつては英文典（文久二年十月）・和蘭外科醫書（文久三年五月）・和蘭眼科醫書〔岡嶋恭庵の依嘱〕を翻譯し、あるひは得意の醫術を以て、當時筆紙に盡せざる慘憺たる囚人たちの病氣を治療し、また病囚を親切に看護した。さらに衛生状態が驚くべき劣悪であつたのに對し、その改善策を上申し、當時まで長く無視されてゐたわが國の監獄衛生および病囚取扱ひにつき貢獻することが頗る多大であつた」。〔住谷「三瀬諸淵の研究」、前掲論文、443頁。〕諸淵の出獄放免に際して、幕府はその在獄中の、獄中衛生改善意見の上申と、病囚介抱の功績を賞して紋付上下を下賜した。なお、在獄中の諸淵と高島嘉右衛門、佐倉藩の西勝郎三人の肝胆相照らした断金の交りについては、『高島嘉右衛門自敘傳』（大正6年刊。）に詳しい。各々、孔門の顏淵、子夏、子路に喩えられた「三人は水魚の交を訂す、三人相集まるや常に周三は西洋の事情を語りて鎖港〔鎖国〕の到底行ふ可からざることを説

き、「伊豫國宇和島藩醫 [二宮敬作?] の悴にて三瀬周三と呼ぶもの、和漢の學に通じ、兼ねて英蘭の兩語に練達せるのみか、醫術武術にも造詣し、洵に得易からざる人物」(西村)と評された。西村勝郎は、後の「心學」および国民道徳論の儒教的理想主義者・西村茂樹の実弟であった。ただ、愛国者・西村茂樹、また実学者・福沢諭吉の名は、諸淵の「師事・懇親せし人々」一覧に載っていない。(住谷、同論文、502頁。)その後、諸淵は高島嘉右衛門を介して伊藤博文の知遇を得る。諸淵は、明治3年[1870]、大阪病院勤務の傍ら、徒刑圀圍局(醫務局)幹事を兼務すると、諸外国の徒刑事例を繙閲し、「文明的な」獄制の一新と改善に尽力した。新政府は「徒刑圀圍局幹事兼務中勵精奮發指揮行届候段神妙之至依之賞讃候事」と、褒状を下付した。

- (六) 軍制改革における先生の隠れたる(獻言と)活動-----「伊藤博文は深く周三の學殖と人物に服し周三を陸軍軍醫總監に推薦しやうとする意があつたが、名利に恬淡な周三は何處までも純學者として職分奉公に終始せんことを希望し、博文の切なる勸告をも辭退して竟にうけなかつたといふ。」(住谷『蘭醫三瀬諸淵傳』、前掲書、47頁。)明治初期、海軍の脚氣の予防法を確立した高木兼寛は海軍軍醫總監に登り詰めるが、後に陸軍軍醫總監となる森林太郎と対立した経緯がある。一方、維新後、明治6年[1873]に初代陸軍軍醫總監となった松本良順は、近代日本医学の基礎を築いた。戸塚文海が初代海軍軍醫總監となったのは、明治9年[1876]である。二人とも幕府医学所の医師であった。軍制改革といっても、諸淵の場合は、大阪病院の設立や、行刑衛生の改善を通して、その医師としての業績が評価されたと言えよう。それは、シーボルトの幕府への進言を実践することであった。「東京帝大シーボルト日本語文書第十號」によれば、次のごとくである。「第一外國人と貿易及び交通するに關する件、第二輸出に適當なる日本品又は日本國內に充つべき日本品の指定及び交通に關する件(即ち啓蒙に用ゆる草木及び鑛山植物等)第三日本並びに歐羅巴の政體に關する件、第四學問技藝或は耕種に關す

る件、第五海軍を建立して漸次之を擴張し、將校歩卒を取り立つる件、國軍の設備に關係する諸件（但し國軍は危險の時に當つて其の國を防御するものなり）につき、假令自分一身を以て盡く之に當ること能はずとするも、これにつき必要なる説明を與へ、此目的を達するに緊要なる方法手段を指摘し、自ら爲し得べき丈けは之を施行し、又其實效を期するために助勢すべきことを説き、且つ之を成就する」（呉秀三『シーボルト先生』、461頁。住谷「三瀬諸淵の研究」、前掲論文、456頁より引用。）確かに諸淵は「獨乙陸軍々制」（獨文手記。明治4年、東京醫大在勤中。）を遺している。しかし諸淵の軍制改革への貢献は、後年明治12、13年頃構想の西周の「平常社会論」としての兵賦論とは異なつたのではないか。藩兵を廃止した近代軍隊の確立に際して、「従命法」に、下士官、一兵卒に至るまでの「異議申し立て権」を認める西周「兵家徳行」（モラルの確立）の純軍事組織論の上申とは別種の、軍医学系のものであったと思われる。実際、軍制改革論争の末、実現しなかつたとはいえ、諸淵の英学の旧師、元長州藩士、医師・兵学者の兵部大輔・大村益次郎の国民皆兵で近代化する軍制改革の構想があつた。維新時は、東京以上に、むしろ大阪が日本の政治・外交・文化の中心地だつた。大村は、薩摩派の牛耳る在東京の新政府から離れて、陸軍の根拠地を関西に置くべく、下士官練兵所、兵学寮、造兵工廠、弾薬庫、軍病院といった陸軍中核施設の新設を企画していた。諸淵がまず大阪病院の設立に関与し、伊藤博文が諸淵を陸軍軍医総監に推挙したのも、そうした裏事情を物語る。しかし、諸淵はその推挙を拒んだ。

- (七) その他専賣特許法等の立法への參與 --- 諸淵の「専賣特許法制定意見書」（手記。年代不明。）が残っている。明治4年〔1871〕に最初の特許にあたる「専賣略規則」（太政官布告第175號）が布告された。政府も運用不能で、翌年〔1872〕廃止。改めて明治18年〔1885〕本格的な「専賣特条例」（太政官布告第7號）が公布施行された。福沢諭吉『西洋事情』（慶應2年〔1866〕刊。）や神田孝平「西洋雜誌」は西洋の特許制度を紹

介して、伝習者の保護が国内外の国益の保護及び国家富強の源として、関税自主権のない不平等條約改正問題と相俟って、法制度の重要性を説いた。神田孝平は明治4年の「專賣略規則」制定に関与したとされる。明治10年[1877]逝去の諸淵の「意見書」もその頃の手稿かもしれない。

(八) (大洲肱川河原における) 電信の實驗、輕氣球の試乗、鐵道敷設の(現場)監督、大阪造幣局・築港等への新知識による啓蒙(・獻言) ---- 安政5年[1858]大洲肱川河原にて、諸淵は本邦第3番目あるいは5番目の電信の實驗を成功させた。[20歳。]萬延元年[1860]、輕氣球を製作し試乗。[長崎。]慶應3年[1867]、造幣権少輔として大阪造幣局の創設につき企画した。明治5年[1872]、文部八等出士となり、傍ら親友高島嘉右衛門の大藏大輔大隈重信・同少輔伊藤博文への進言を動機とする、東京横浜間鐵道敷設を鐵道の父・井上勝とともに監督指導。明治7年[1874]及び8年[1875]、東京土木寮出士。築港のため。

(九) 維新草創の際における多忙の間に醫學・生理學・藥學等その他自然科學關係の外國書の翻譯による新知識の實踐と啓蒙等 ----- 本稿前号、手記著書一覽を参照。また、通説ではお雇い外国人フルベッキの指導とされる、本邦初の洋書店(岸田吟香が東京・日本橋に開業)開設に際して諸淵の助言と資金提供があったという。[三瀬彦之進翁談。]

さて、住谷は、平田神道を繼承する一方で、開国主義に立った常磐井巖弉(中衛)の国学(古学)精神と、叔父・二宮敬作(如山)に学び開明的新知識に支えられた諸淵を、鎖国堅持の「佐幕開国派」及び、吶喊するラマンチャの騎士のごとき「尊皇攘夷派」と対比して、「賢良派」(インテリ)、「書齋派」でありながら、「良心的」「中立派」に傾斜する「尊皇の開国主義者」と複雑に分類している。ただ、常磐井巖弉には洋学上の著述も開国論的言説も遺されていない。他方、「安政の三奇人」の一人・尊皇攘夷の高山彦九郎の草莽性に発し、常磐井同門の「和魂和才」と称すべき人物に、諸淵と対比著しい巢内式部(須内信善)と三輪田元綱が数えられる。前者は大村益次郎襲撃の嫌疑をかけられた、「視野狭窄の」尊皇国粹排外主義の急先鋒、後者は絶対倒幕主義者とされる。この



諸淵を、常磐井国学直系で再生産された「和魂洋才」の典型と見る住谷の解釈に、現在の諸淵研究の第一人者・三好昌文は異議を唱えた。「[諸淵の] 尊皇思想は水戸浪士などの攘夷運動ないしは、長州藩士のような倒幕運動を行うような実践的なものではなかった。尊皇思想にしても開国思想にしても、幕末のはげしい歴史のうごきのなかでは、保守性、進歩性のニュアンスをさまざまにみせる。周三はどうみても政治活動家ではないのであるから、住谷氏の規定には少々むりがあるようにおもわれる。かれの場合、国学とは国学的教養ないしは国学的心情というほどのいみである。開国思想はシーボルト・敬作によってやしなわれたことはもちろんであるが、それがかれ自身の行動とはならなかった。」<sup>(55)</sup>しかし、後述するように、富裕な実家塩商の家督を放棄し、当時最も先進的な長崎蘭学の学究一途に邁進したはずの、諸淵の忘れられた事績と言動の、政策提言を超える政治的性格は際立っている。大洲藩主・伊達宗城公に大政奉還、王政復古を助言したとはいえ、諸淵の現実主義は尊皇主義を守りつつ、左幕でも倒幕でも攘夷でもなく、開国とはざまを縫うような宥和策としての公武合体論にあったと思われる。諸淵は、尊皇、左幕、倒幕、攘夷、開国の思想と立場の組み合わせが錯綜乱立して、先行し国内特定勢力と呼応して募る暴風のような列強の政略、外圧次第で変節にも転向にも急転、反転、逆転し、外発的に急迫する「文明開化」時代の子と言えた。当初、佐幕主義と一体化していた尊皇主義はその後、討幕攘夷主義に直結し、「維新以前の開國主義と、以後の開國主義は、同じ開國主義でありながら、その歴史的意義は正反対になる」<sup>(56)</sup>。幕府の延命と海防に軸足を置いた消極的開國主義から、維新政府の国家理性に基づく、国家としての「自立と自尊」を求め、自己免疫システムとしての富国強兵を推進する積極的開國主義への断続的移行である。かつて文政年間の蘭学・洋学は、福利厚生に非政治的に限定的な医学及び天文地学を中心としていた。しかし天保・嘉永、安政期には、洋学の性格と役割は、大村益次郎の蘭学が象徴し、後の西周や諸淵が一翼を担って継承改革するように、「兵馬の権」即ち兵学・軍制中心に一変する。確かに自己規律の言動に一貫性を求めるには至難の変転があったと言えよう。

従って、内発的な思想を起爆剤として転回していた、「良心的」「中間人」の洋学派・諸淵のソクラテス像を斟酌して、三重に自己形象化する住谷の諸淵論には、ダモクレスの剣のごとき危うさが介在していたように思われる。住谷の諸淵「尊皇開國主義者」論に当時、賛同したプロレタリア作家にして幕末維新史研究家・貴司山治は、当時こう論断している。<sup>(57)</sup> (傍点、筆者)

「尊王開國」の政治的性格は、一と口にいふと「王政維新」に對する中立派である。維新運動の實行に携はらず「思想」の中で尊王を專一とする時、これを開國に結びつけやすい、けだし、書齋派の類ひであらう。/けれども、三瀬周三のごとく、少年時代に故舊において養つた尊王古學の精神と、青年時代にえた蘭學による開國思想の二つをその身に併せ具へて、尊王攘夷派の矢面に死を覺悟して立つたものは、悲壯でさへある。私は [そこに]・・・周三の人間的な煩悶さへ嗅ぐのである。」(傍点、筆者)

そもそも諸淵について住谷の言う、無限定の「良心的」とは、いかなる意味であろうか。戦後の著作『ラーネッド博士伝』で規定される「歴史的進歩に棹さず(進歩的文化人)」の意か、信條の絶対的真理と正義と、他の絶対的悪の確信の欠如ゆえに「煩悶」「懊惱」する思想家の「良心」、「誠実」の謂いであろうか。あるいは、言論弾圧や政治的制約の下、一切の政治的価値観の排除を偽装する、ウェーバーの「没価値性」論を最後の砦として、守るべき学者の「良心」の弁明であろうか。そこには、戦時体制下の「國體の本義」、「神國日本」の皇国史観、大東亜共栄圏論や「日本精神」、「日本主義」への大政翼賛、総じて「全体主義」批判という目的意識の手法も隠されていたであろう。「戦時中のわが国では、ウェーバーが、おしよせる全体主義を批判するためのかくれみのとして大いに役立った。」(傍点、原文)<sup>(58)</sup> 一方、住谷の母校・同志社の建学の精神を、新島襄は明治期の新訳語たる「良心の全身に充滿したる丈夫」の育成に置き、その直弟子にして「日本のカント」と称された大西祝は、西洋哲学史の教養に充ちた本邦初の『良心起源論』(大西祝全集・第5巻、警醒社書店、明治37年。)を上梓した。<sup>(59)</sup> 住谷はこの「同志社アカデミズム」の薫陶を受けた学究であった。ところで、古代ギリシア語(συνείδησις、シユネイデーシス)

を原義として、ラテン語（conscientia、コンスキエンティア）経由で近代欧米各語に流入する「良心」概念には、もとより哲学史上に流布しつつ変遷する3種の意味理解が確認される。「神に従って知る」、「世間に従って知る」、「自己自身に従って知る」がそれであり、新島襄および「同志社アカデミズム」教育の、少なくとも当初の意嚮は、無論「神に従って知る」「良心」の涵養にあったと言えよう。後述するように、プラトン描くソクラテス「不知」論には、同時にこの3種の「良心」あるいは「意識」の区別が認められる。しかし、諸淵論における住谷の無規定の「良心」に、かかる識域や含意の区別があったかどうか。さながら住谷の「矛盾と懊悩」の韜晦を写して、曖昧である。

住谷は、諸淵の「文明哲學觀の如何は不明」としながら、その「人」を次のように評した。それは、横井小南由来の「五箇條の御誓文」のごとくに、「知識を世界に求めることは、日本の民族的文化發展をばその偏執より脱せしめ、普遍主義に立脚する世界原理の探究的態度であり、大いに皇基を振起すべきことは、日本民族の特殊性とその永遠への光榮とを、その創造的個性化において、眞に個性的に自己を形成することに關聯するものである。この相互密接に結びついた普遍性に立脚する特殊性、および一般的なるものと、わが固有なるものとの必然的關係を如何に正しく把握すべきかといふ點への反省こそが、日本的なるものとは何かといふ問題への妥當な解決への鍵を提供する」（傍点、原文）。植民地肯定論と共通の「世界史的使命」、即ち「新しい文化創造の根本的態度」を、「諸淵の生涯を特徴づけた彼の文化意識」が共有するという視座が、諸淵評価の枠組みである。その「良心的」諸淵觀は、以下のとおりである。<sup>(60)</sup>

「周三〔諸淵〕の人と爲りは頗る名利に恬淡で、天真爛漫、ものごとに拘泥せぬ事が特質であつたらしい。交友においては情愛が深く、優しい思ひやりがあり、人生の本質的なもの、崇高なものに對しては、不斷に凝視しつつ怠らず勉學し、しかも學を誇るやうな輕薄なところがなく、詩藻豊かに恵まれ、折りに觸れて和歌をものし、あるひは彩筆を揮ひ、時に奇智に富んだ漫畫風なものを描き、非常に眞面目でありながら、人柄に角がなく、頗るユーモアに富んでゐた。かういふやうなことが、多くの逸話や日常の行動に於いて窺

はれるのである。現在でいふなら「良き意味におけるインテリ」であり、「高い教養のある知識人」とでも云ふべきものであつたらう。私は傳記を繙き、或は故高子刀自から直接追想談を伺つたが、大變好意のもてる人柄のやうに感ぜられる。彼を歴史上の人物として徒らに英雄化すといふのでなく、ごくわれわれに身近な血の通つてゐる人格として、眼の前にその呼吸を感じつつ、しみじみと味ひ得る親しみ深い人間と學者を感じてゐるのである。」

實際、住谷の「尊皇開國主義者」、即ち馬場辰猪について言われたやうな「十年素養の學殖を以てして、祖國の荒原を開拓せんとす」る、職業と好學的志向の一致した職分奉公に徹する新知識人の諸淵像は、三好昌文の批判を呼んだやうに、奇妙に複雑な規定である。「三瀬周三の如き霸氣縱横の國士」と『高島嘉右衛門自叙傳』を引用した住谷は、洋学「書齋派」諸淵を「進歩的、あるいは「良心的」、「中間的」、「愛國主義」と形容しつつ、奥付まで71頁の小冊子、大政翼賛會愛媛縣支部刊行の『蘭醫三瀬諸淵傳』で、執拗に次のように繰り返す。叙述の順に、煩を厭わず引用する。<sup>61)</sup>

「〔再航した〕シーボルトに従つてゐた周三は・・・幕府の政策のためにその知力が動員されたわけであるが、ここに尊皇開國主義に立つ進歩的知識人の特殊な歴史的立場と深刻な煩悶とを認めねばならぬ。」

「〔冤罪であつた〕周三の逮捕と佃島への下獄前後の事情は・・・尊皇攘夷と佐幕開港との中間的思想を懐く政治的變革の實踐から遊離してゐる良心的知識人の不可避的な歴史的運命でもあつた。」

「周三の抱懐した尊皇開國思想は、尊皇攘夷と倒幕論者の實踐による政治的・具體的變革によつて初めて理想と現實との矛盾より發展的統一にまで齎ることができ、彼の學んだ洋學と醫學とは維新の變革によつて政治的にも社會的にも矛盾を感ずることなく、明治政府への職分として全面的に活用することができるやうになつた。〔諸淵が〕潑刺たる希望と文化的な活動慾に燃えたであらうことは察するに難くない。」

「大村〔藏六、益次郎〕・二宮〔敬作〕・シーボルトによる洋學は、科學と普遍と進歩とヒューマニズムの世界を自覺せしめた。轉換期の子としての周三

は、主體的にこの二潮流を自らに綜合した。意識的にあるひは無意識的に、それは三瀬周三なる進歩的愛國主義者の社會的人格を生成せしめたであらう。叔父敬作を介してシーボルトに従ふ運命を擔つた周三は、科學と普遍と進歩とヒューマニズムの世界に憧れつつも、徳川幕府の陣營に動員されてゐた。その限りにおいて彼は意識すると否とに拘はらず封建的將軍政治の延命政策の側に在る閣老安藤信正の庇護の下に生きてゐたのである。」

「幕府の保護の下にありながら、彼の思想的立場の根底は、尊皇であり、傳統日本への愛であり・・・周三の信奉する尊皇論は現實の政治運動の中核として攘夷論と結んで、開國において周三と揆を一にする幕府の打倒を企ててゐる周三は、政治の一大改革を企圖する攘夷倒幕の現實的實踐から遊離した存在であつた。しかも攘夷倒幕論の中樞をなしてゐる尊皇こそは、周三の生命をかけての信念であり、思想である。複雑なるこの社會的、歴史的立場に周三は生き抜かねばならなかつた。」

「[周三の] 尊皇愛國の精神は殆ど生得的であるとさへ思はれる。しかも洋學とその科學的精神は彼の生命をかけての目標であつた。政治的實踐から遊離してをり、洋學を通して世界の情勢に注目してゐた周三が觀念的には尊皇開國に據つたのはけだし當然であり、彼の如きは社會生活の經驗を経た者として良心的な態度であつたといはねばならぬ。良心的であつたが故にまた矛盾と煩悶の苦盃を味はねばならなかつた。政治的實行力を有つた尊皇攘夷論と倒幕運動によって、社會的變革が實現せられたとき、彼は初めて矛盾と煩悶なくして、勇ましく新時代に生きる道を發見し得たのであらう。」

この「深刻な煩悶」と「中間的思想を懷く政治的變革の實踐から遊離してゐる良心的知識人の不可避的な歴史的運命」は、諸淵固有のものではないであらう。この「社會的變革」待望の言辞は、「第一の開國」に遭遇した諸淵に仮託され、「第二の開國」間近にあつて、大政翼賛の酷評や戰爭批判を意識的に避けたと思われる、新進氣鋭のマルクス主義學者・住谷悦治自身の隠された「偽裝」、釈明ではなかつたか。

實際、住谷の反戦・非戦平和主義は叔父・天來と内村鑑三仕込みであり、あ

る出陣学徒に敗戦を予言して、悲愴に讚美歌 405 番「また会う日まで」を饒に歌ったという。<sup>(62)</sup>しかし、住谷は諸淵伝と同年（昭和 17 年）刊行の『大東亞共榮圏植民論』（前掲書、「序文」4 頁。）で、なぜかマルクス主義学者として「植民地の必要」を肯定した、住谷流の「進歩的愛國主義者」の至情を、次のように激白している。

「大東亞戦争の目的は宣戦大詔に拝せらるる通り、わが國の絶對的な自存自衛、敵性勢力の撃破、および東亞永遠の平和の確立・・・而して八紘爲宇の理想に基づく大東亞新秩序建設の世界史的意義の重大さはすでに周知のことである。・・・宣戦の大詔が渙發せられるとともに、一億國民の向ふべき處は炳として天日の如く明かになり、すでにそこには寸毫の遲疑も逡巡もあるべき筈がなくなつた。滿洲事變を経て大東亞の黎明を感じたわれら日本人は、十二月八日の大詔を拝するに及んで、新東亞誕生への光明に、痛きまで身心に感激を覺えたのである。しかして新東亞建設の路が如何に險難であらうとも、また戦ひが如何に長期に亘らうとも、われらは、わが肇國の大使命の達成まで戦ひ抜かねばならぬことを感じたのである。われらは、宣戦詔勅の一字一句、否、さらに一句一行の間を埋むる無量の聖旨をばことごとく心をこめて拝讀し、大御心を奉察しなければならぬ。多年、歐米の搾取の下にあつた東亞の諸國から、彼らの勢力を徹底的に排除するのみでなく、萬邦の平和と共榮を念とし給ふ大御心を奉體して洵に恐懼感激に堪へぬものである。」（『大東亞共榮圏植民論』、前掲書、「序文」1 頁 - 「本文」2 頁。）

子安宣邦は、「当時の時流の書に紛らわしい」、住谷「本意の本ではなかった」同書を古書店で偶然見つけて一読して驚愕し、住谷自身が嫌ったはずのその「大言壮語」に落胆、辟易した旨を明かしている。<sup>(63)</sup>戦前左翼・林房雄の衝撃的な戦後「転向」表明の書『大東亞戦争肯定論（正統）』（番町書房、昭和 39-40 年。）と同様な印象を受けたのではなかったか。それに対して、田中秀臣は『臺灣紀行』と一様な、「題名と体裁だけは時流受けしそうな」同書の過半が大量の政府公文書を羅列しつつも、「隨所に三瀨研究と同じ視点から排他的な日本主義、ナショナリズムへの警告」（傍点、筆者）<sup>(64)</sup>を忍ばせていると、敢えて「深読み」

している。実際の住谷は戦後、同志社山宣会（山本宣治）会長となっても、『河上肇』（吉川弘文館、1963年。）を著しても、戦前のこの同志、あるいは京都時代に師と仰いだ活動家たちと一線を画していたかつての自身の立ち位置についても、逆の「沈黙と抵抗」を貫いた。それにもかかわらず、戦後、昭和22年、GHQによる公職追放に連座して、社長兼編集局長・住谷は夕刊京都新聞社を失職した。戦前の松商高時代の著作『大東亞共榮圈殖民論』（生活社、昭和17年。）の、逆に「やる気のない」「偽装」が仇となって、戦争協力の槍玉に挙げられたからである。かくて住谷は、戦中戦後に「右からも、左からも」挟撃された。「ファシズムに抗して守りづけた学問の自由」の代償が、それであった。戦犯大川周明を含めて、20万人以上が公職追放された。しかし、その後の住谷は、配給された言論の自由と「閉ざされた言語空間」で戦後民主主義の啓蒙と所謂「奴隷の言葉」を鼓吹する「安全な思想家」の一人として重用された。昭和24年[1949]、住谷はGHQの指令により同志社大学に復職後、昭和38年[1963]、同大学第14代総長に就任し大学改革に邁進する。

しかし、驚くには当たらない。当時の誰もが「二足の草鞋を穿いた」わけではなかったとしても、「赤化」詩人でもない高村光太郎が戦後、自己批判したような「天皇あやうし」（「暗愚小伝」）という真珠湾攻撃を伝える大本营発表への直感と衝迫、大詔渙発への感激はもとより、当時巷間に溢れたこうした愛国時論の言辞言説は枚挙に暇がない。<sup>65</sup> 戦前、ナチズム批判の論文「ナチス世界観と宗教の問題（1-3）」（國家學會雜誌55巻12號、昭和16年/56巻2、4號、昭和17年。同『國家と宗教』所収、岩波書店、昭和17年。）を公表した南原繁でさえ、戦後、親友の故人三谷隆正の旧稿「ロマ法學と大東亞法學」に苦言を呈したにもかかわらず、開戦当時は、大東亞戦争の「世界史的使命」「歴史的運命」の「聖戦」を肯定して、むしろ三谷以上に、過激に以下の数首を詠んでいる。日露戦争直前の、南原の師・小野塚喜平次やローマ法学者・戸水寛人を数える「東大七博士」の開戦建白書を連想させ、住谷のそれと同様、その詠歌の字余りに南原の感奮が伝わるようである。一方、三谷隆正にはそうした開戦への快哉や、「超國家主義体制」の是認、またナチズムの賛美も批判も見あ

たらない。(同「南原教授著『國家と宗教』を讀む」法律時報6月號、昭和18年。)

「南の洋に大き御軍進むとき富士が嶺白く光りてしづもる」

「ひたぶるの命たぎちて突き進む皇軍のまへに ABCD 陣空し」

こうした住谷の「本意ではない」と評される大東亜戦争肯定論は、果たして「悔恨共同体」(丸山眞男)と「無念共同体」(竹内洋)という、近現代日本知識人の論壇共同体の系譜をめぐる範疇の聞き合いと対比の内に位置付けられるであろうか。<sup>(66)</sup>

「悔恨共同体」の無批判な戦後民主主義擁護の感情論は、1980年代には風化が著しくなるとはいえ、「敗戦後、戦争を食い止められなかった自責の念」と、非戦国家・新生「想像の共同体」日本創造の気負いが緋い交ぜとなって形成された錯綜感情の共有体と規定される。一方、後者は、「戦争をやむを得なかったと捉え、敗戦を悔しく思う感情共同体」と対抗規定される。戦前に国粹主義の「危険な思想家」として告発され、戦後変節した典型的な「悔恨共同体」の一員を標榜する「進歩的文化人」山田宗睦は、戦後民主主義の規矩に同調しない「無念共同体」の反動的な「危険な思想家」群を恣意的な中傷にも等しく、一方的に断罪した。「わたしは〈戦後〉にすべてを賭けている。この本は、戦後を擁護するとともに、戦後を殺そうとするものたちを告発する書物として書いた。せいっぱい書いた。」<sup>(67)</sup>しかし、僚友とも言うべき吉本隆明ですら「戦後思想を最低の鞍部<sup>ポトム</sup>で擁護した」と敢えて同書を酷評し、村松剛は思想自体の孕む危険性ゆえの、「危険な思想家」の同義反復の愚を突きながら、「悔恨共同体」を「戦争が生んだ畸形兒の、精神的類型」と、早くもその狂熱を一刀両断にしている。<sup>(68)</sup>「山田宗睦が墨守しようとした戦後の文化空間が、戦後半世紀を超えた今、山田の言う危険な思想家によってでなく、愚かな思想家や病んだ思想家によって大きく揺らいでいる。」(呉智英)「メディア知識人」清水幾太郎の左右への転向は措いても、思想自体の危険な魅力を些かも発散しない「山田の後裔である安全な思想家」、つまり敗戦利得者の跋扈する戦後の住谷はその雄の一人でなかったか。

「空想的」「一国絶対平和主義」、所謂「戦後レジーム」の「お花畑」とそれ



を支えた、所謂「東大レジーム」による論壇と人脈の壟断が、国家と国民を分断する「進歩的」マスメディアに唇齒輔車して成立した。「後ろ向きの進歩主義者」（高島善哉）丸山眞男が「超国家主義の論理と心理」を告発し、変節問題の絡む宮沢俊義とともに属国「占領憲法」に「八月革命説」を唱道して、戦後論壇の「進歩的文化人」の寵児となったからである。水谷三公は、その「戦後日本の進歩的啓蒙主義は、戦争で中断された戦前左翼の夢が、一九三十年代欧米インテリの知的風潮と共鳴を起し、増幅されて生まれた産物だった」と、竹山道雄の言う、反大正教養主義の「新ソフィスト時代」を総括している。<sup>(69)</sup>「ある民族が理智的に考へる事をはじめるとき、權威を疑ふ批判的破壊的な時代を通過するものだ。」（竹山）「汝自身を知れ」を不問に付す、無自由な公式主義唯物論の風靡に、新ソクラテス、出でよ、というのである。実際、若き日に特にH.ラスキに魅せられ、長谷川如是閑の講演会で検束連行されて「不安に脅えた」学生丸山ばかりか、東京帝大法学部自体がその偏向性を名指して指弾された。「狂気」とも揶揄された、ソクラテス張りの「虻」のような、反西洋思想と反近代普遍主義の土着主義者・蓑田<sup>むねき</sup>胸喜は、近代主義者・丸山の「最も怖れた男」と言われる。「學術維新」を呼号して神洲不滅と日本精神を掲げ、「ますらをのかなしき命積み重ね積み重ねまもる大和島根を」と詠んだ歌人・三井甲之とその「極右」結社・原理日本社、及び同社の「民間思想検察官」（慶應義塾大学教授、敗戦直後に縊死）蓑田が、学殖の質をかけて大学批判の集中砲火を浴びせたからである。（蓑田胸喜・松田福松『國家と大學：東京帝國大學法學部の民主主義國家思想に對する學術的批判』、原理日本社、昭和14年。）一方、戦後GHQに解散を命じられた「黒龍會」や「玄洋社」とは異なって、影山正治の「大東塾」は伝統的正統右翼と喧伝される擬古の「祈り」の尊皇主義を貫き、「陛下へのお詫び」と戦後復興の人柱として、14烈士の自刃を以て総括した。一方、丸山は復活した戦後啓蒙の「東大レジーム」を代表する最も「安全な思想家」の星となった。学閥を異にする住谷も、拷問を経験した反戦平和主義者として登壇し、「ファシズムに抗する」戦後民主主義「宣教」と「啓蒙」の一翼を担ったと言えよう。

他方、歴史の不変性に深く学び、単一イデオロギーへの耽溺やいかなる熱狂にも「自由」に距離を置く田中美知太郎や林達夫、文学趣味を排した福田恆存の批評眼は、「悔恨」や「無念」のいずれの共同体にも属さない。各々が親炙したエピクトロスとプラトンに比定される、林の非政治的、「日本文化会議」を主宰した田中の政治的言説にとって、戦中戦後の相反する価値判断は「裏返しにされた」同一心理の産物にすぎなかったであろう。大東亜戦争開戦への熱狂と「戦後民主主義」への無批判な同調と肯定は、住谷や南原繁に見られるように、事情の如何にかかわらず、同根の時流便乗と映じたはずである。強い光は濃い影を伴い、高く登る者は強く落ち、怒号は俄に枯れ、狂熱は忽然と冷める、そのように「聖戦」の、一方のやむなしの高揚と、他方の無根拠の否定は同源と観念されたであろう。福田恆存は、言葉の道具性を否定して、経験と存在を開く言葉の本質を、国語表記の伝統回帰に求めて、時流に抗した。実際、「悪魔払い」すべき「虚妄の戦後史」に、「心の心棒がそのとき音もなく真二つに折れ」、「日本よ、さらば」と呟いたエピキュリアン林達夫は、かつて住谷の唾棄したはずの大言壮語の「かかる心に映るぎすぎすとうわずった、跳ね上がった言論の横行しはじめ」、「浮き浮きした発言はほとんどみな白々しい空語、空語、空語であった」<sup>(70)</sup>と、やり切れない感懐を書き付けた。戦後の一老嫗の詠歌「かくばかり醜き国になりぬれば捧げし人のただに惜しまる」、この時代に逆行する痛言に、林達夫もまた同感を禁じ得なかったであろう。

住谷と同様に、近代主義者・丸山眞男には「西ヨーロッパ思想の論理構造をもって東洋思想または日本思想をさるゝ日本伝統思想とそれをささえる権力とへの、合理主義の一使徒の悲壮な対決」<sup>(71)</sup>の意図があった。住谷の二兎を追う思想遍歴と終生の学問的営為の結着が、計算高い合理主義による文学趣味的な「中間状態」の架橋であったように、「悔恨共同体」の近代合理主義という「西意 (= からごころ)」の論理構造は、さしあたって「無責任の体系、日本を切る」最強の武器となった。しかし、当然丸山はこの論法が、荻生徂徠の「古文辞学」を転倒転用した宣長の「漢意 (= からごころ)」批判の、諸刃の剣となるその転倒転用、徂徠返りであることを熟知していたであろう。宣長

の敬重した「大和ごころ、古意<sup>いにしへごころ</sup>」を引き裂きながら、「後ろ向きの進歩主義者」丸山の慧眼はこう喝破したからである。<sup>(72)</sup>「日本の知性における「普遍主義」に疑問をなげかけるとすれば、それは「普遍主義」が、中国とか西欧列強とかいう、日本の「外」にある特定の国家や、文化の特定の歴史的段階—十九世紀の西欧文化といった—に癒着し、それ自体が一個の特殊主義 (particularism) に墮した、あるいは墮する傾向がある、という点にある。」

ファロスの王・坂口安吾は、「元来外国かぶれをすること自体が、日本精神の一特質であるかも知れないのである。これは冗談や自嘲ではない」と、特殊日本的思惟の伝統とも言うべき「他民族中心主義」(池田信夫)、わけても西欧近代主義、後にE・サイードの告発する侵略的「オリエンタリズム」への屈従と継承を吐き捨てている。<sup>(73)</sup> それ以上に、長谷川三千子は、武力と宗教と思想を携えて東漸著しい「自民族中心主義」に対する屈服という、古くて新しい宣長問題の深刻さをこう述べている。<sup>(74)</sup> 「利己のための利他」から「利他のための利己」に変貌する精神の「古層」、丸山の言う「執拗低音」の齎す所謂「奴隷の言葉」の悲劇が剔抉されている。

「ところが、ことはそんなに単純ではないのである。そもそも何で我々は「古意」「やまごころ」などといふことを言はなければならないのか? 何故そんな風に自分達のあるべき姿をあとから、苦心して学び直さなければならないのか。何故我々は、それ程までに自らを失ってしまったのか——その「何故」を問ふことなく、ただ闇雲に「古意」などを学んでみたところで、それは又、ふたたび同じ道を通つて失はれてゆくしかない。我々が、ほとんど必然的に我々自身の在り方を失つてゆく<sup>メカニズム</sup>機構それ自体を見ない限り、我々が本来の我々になるといふことは不可能である。そして我々が我々自身を失つてゆくその機構を、宣長は「漢意<sup>からごころ</sup>」と呼ぶのである。」(傍点、ルビ、ともに原文)

この「からごころ」の語法が「漢意」から近代「西意」へと定着する前提の下、住谷は諸淵論をこう論結して擱筆した。<sup>(75)</sup> 「大村 [益次郎]、[二宮] 敬作、シーボルトによる洋學は、科學と普遍と進歩とヒューマニズムの世界を自覺せしめた。轉換の時代の子としてしての周三は、主體的にこの二大潮流を自らに

総合した。」「幕末から明治期にかけての複雑なる轉換期において尊皇開國の立場に立つた蘭醫周三こそは、眞に日本的なものと西歐的なものを一身のうちに総合しつつ、[尊皇主義と開國主義といふ] 特殊なものの特的なものとを結び、普遍的立場を考慮しつつ、その苦難の道に生き抜かうとした日本的な人生生活の勇士の一人であった。」「西意」を習合する新生日本文化の創造のみならず、中央に対する地方文化創生の範型として、住谷にとっての諸淵は「日本の思想」ならぬ「日本の理想」であった。住谷は、過熱する国粹主義に「抵抗」する柳田国男・折口信夫の民俗学や、さらに現場主義に徹した渋沢敬三・宮本常一の民俗学の提唱を知っていたか。後年論壇を風靡する「中心—周縁」論を先取りしつつ、「近代の超克」論は辺境フロンティアから一矢報いる逆襲を、一方住谷の「中間人共同体」はその統合を提唱したと言えよう。しかし、諸淵はこうした表層の期待の喧噪から一人傍流へと身をかまし、思想の伝統自体の深部に降りてゆき、孤然とソクラテス手稿後篇を書き付けて、「声低く語る」ばかりだった。明治10年[1877] 他界の諸淵のソクラテス手稿後篇の執筆は、征韓論を発端とし、開國主義の変貌を画す「明治6年の政変」を契機とするかも知れない。

「日本民族が單に傳統文化の差別性に偏執するのではなく、その特殊性を認識し、自己媒介的にあくまで個性的であらうとするところに民族的特殊性に立脚する普遍主義が見られるのである。單なる自己の特殊性に埋没することなく、その普遍性を生かして日本化し、日本の特殊性において生かすべき特殊性が、高き眞實の世界に到達するといふことに、日本的なるものの反省の核心を置かねばならない。それは偏執的民族主義でもなく、公式的國際主義でもなく、あくまで日本民族の特殊性を抹殺することなくして、日本固有の特殊性を世界の隅々まで輝かすべきものとしての日本の民族的個性への反省である。謂はば、日本的なるものの、世界原理への探究であり、日本民族の優れたる文化的發展能力への合理的な摘出への要望であらねばならぬ。」(住谷『蘭醫三瀬諸淵傳』、前掲書、4頁。)

住谷の『臺灣紀行』(昭和16年刊。)や『大東亞共榮圈植民論』(昭和17年刊。)

にも表れる、この「普遍主義」も「世界史的使命」も、「良心的」の言句と同様、意味不明の概念であろう。この「普遍主義」は、敗戦に至るまで、「文學界」や「日本浪漫派」、総帥・西田幾多郎と、西田率いる京都学派の「世界史の哲学」及び「近代の超克」論で多用される「世界史的立場」、「世界史的使命」、「世界史的意義」のナショナリズム土着主義に皮肉に反発し、外部世界に癒着する、不毛な論壇用語と言うほかはない。「近代の超克」論は対米英の大東亜戦争開戦の肯定の下、マルキシズムによる近代資本主義終焉の宣告と、ロシア革命の衝撃を発端とし、シュベングラの「西洋の没落」にも後押しされて、西洋文化・思想の多角的な総括とその蔓延の克服を提唱した。

かくて、思想遍歴時代の住谷は洋学派とはいえ、「悔恨共同体」ばかりか、それに先行する戦間期、1930年代の社会主義・共産主義運動の勃興に伴って、単一イデオロギーとしての洋学マルクス主義が下支えする厳格な「左翼共同体」をも逸脱している。レーニン主義、及びそれに遅れて輸入され、その両者を批判するトロツキズムの旗の下に括ることもできない。住谷は、諸淵論の語法に従って造語すれば、むしろ二つの思想信条の「矛盾と懊悩」の剣が峰に立ちつつ「転向」も「背教」もしない、第3の道、すなわち特殊日本的な「良心共同体」、あるいは「中間人共同体」に属した書齋派知識人だったと言えよう。独留学経験のある住谷はナチス批判に与したとはいえ、無論「無念共同体」の一員にはなりえなかった。『哲學以前』（大村書店、大正11年。昭和4年、岩波書店刊。）、『詩人哲學者』（小山書店、昭和19年。）を著したギリシア哲学史家・「通称フタヤマ」の出隆も住谷と同じ中間人だったかも知れない。出隆は、「きけわだつみの声」の教え子を戦場に送った自責の念から、「真の新生と自由」を求めて、戦後日本共産党に入党し、まもなく除名された。出は、ギリシア哲学研究者にも共産党員にも「いまだなっていない」「中間状態の不徹底と「含羞」」を告白している。<sup>(76)</sup>

それに対して、歴史の確実性と思想の伝統に範を取る田中美知太郎や林達夫の非留学組、及び日本社会策学会を創設した金井延の女婿にしてトマス・ヒルグリーン理想主義の薫陶を受けた自由主義者・河合榮治郎、三谷隆正に私淑し

た「戦後保守主義者の原像」竹山道雄、「後ろ向きにラディカル」に強靱な伝統への「後方の旅」を続けた文学者・福田恆存は、そのいずれの論壇「共同体」にも属さない。右顧左眄せず、名付けようのない、各々が単独の第4の道、まさに山田宗睦の杜撰なレッテル貼りを超えた「最も危険な思想家」であり続けたと言えよう。

一方、「ふるさとも妻も子もなきわが骨は」と詠じた九鬼周三は、所謂京都学派にも属さず第4の道も行かず、孤然として「絶対矛盾的自己同一性」を否定する、非政治的な原始偶然の哲学研究に沈潜した「冬の鷹」である。昭和16年、歿。戦後民主主義論の陥穽を先取りした田辺元『政治哲学の急務』（筑摩書房、昭和21年。）を知ることもなかった。

常磐井巖戈（中衛）の古学堂精神を具さに体現した、住谷の言う「殆ど生得的愛國者」三瀬諸淵もまた、早過ぎる最晩年に、恐らく九鬼周三と同じ道を辿ったのではないだろうか。諸淵は、住谷の言う曖昧な「普遍主義」とは無縁だったと思われる。唯一の諸淵文献整理者・住谷が殆ど注釈しない、あるいは言及不可能な、散佚したソクラテス手稿後篇「哲學」に、それが推定される。ところで、南原繁、河合栄次郎、竹山道雄、住谷悦治の英獨留学組はいずれもナチス批判を行った。同時に、「学問に国境はない、しかし学者には祖国がある」を信條とした河合、竹山は愛國の自由主義者として、内外の左右両翼の「全体主義と闘った男」である。自由主義の信條に忠実に、ナチス批判にも、社会主義・共産主義批判にも、「超国家主義」批判にも怯まなかった。一方、「ファシズムに抗して学問の自由を守った」住谷の「偽装」は、生活の逼迫と思想遍歴ゆえの「沈黙と抵抗」の名に値したかどうか、判然としない。

従って、同じ洋学派の書齋派知識人とはいえ、第3の道、特殊日本的な「良心共同体」、「中間人共同体」に生きた住谷は、その「矛盾と懊悩」のalter egoに固執する釈明のあまり、実像から遊離した諸淵像を描いたように思われる。歴史研究に「誤解（=解釈）」は当然の営為とはいえ、宣長に発する諸淵における国学的問題意識「大和ごころ」と、「（西意）からごころ」の対立概念は、住谷の生涯の洋学的なそれ、「科学的真理と宗教的真理の統一」という「二

つの真理の統合」とは、形式的に似て非なる着想であったに違いない。戸坂潤の糾弾の眼を逃れた、本来「安全な思想家」が、もとより「危険な思想家」に「安全な」自画像を着せた強引な「誤解」と言えよう。

さて、住谷とほぼ同じ体験から諸淵の半生像を創作したのが、「太陽のない街」の実生活を体験しプロレタリア作家から転進した、「孤居をこのむ鷹」の小説家・藤森成吉である。昭和9年は、42歳の藤森にとって転機の年となった。住谷悦治とは異なって、「吉野 [作造] デモクラシーに感化された形跡がなく」、しかも「いつも最左翼陣営にぞくして・・・もっとも誠實な共産黨員であり、ほとんど動揺したことがなく、おそらく右顧左眊の懐疑になやまされたことさへあるまい」<sup>(76)</sup> 藤森は、共産党に資金提供した咎で逮捕され、実刑2年執行猶予3年の判決を受けた。政治活動への一切不関与がその条件とされた。判事が、歴史研究への転身を勧めたという。

その後、藤森は、現代に題材を取りイデオロギー性の露出する創作手法を避けて、目覚めた連作のライフワーク「歴史の河」十数編の小説・脚本の構想を得るや、『渡邊崋山』（改造社、昭和10年。）を皮切りに、崋山周囲の人々、わけてもシーボルトのみならず、高野長英、三瀬諸淵の事績を中心に歴史小説を二篇公表した。藤森は崋山に心酔共感するあまり、「崋山の屈折ないし挫折の掘り下げ方の不足」という、歴史小説の文学的結晶度を犠牲にしても、月並みな「取材」以上の諸文献の「研究者的な」博搜と綿密な考証癖を優先させたからである。<sup>(78)</sup> それが労作とされる『渡邊崋山』の、そしてそれ以後の藤森が一貫して執着し続けた歴史小説の、むしろ欠陥ともなった。

「渡邊崋山といふ人物は、日本歴史のなかで作者 [藤森] が最も愛する人間、乃至その人間の一人である。その性格といひ、才能といひ、まつたく偉大かつ複雑。単に画事だけをとつても無限の敬意と愛情を感じる。その生涯は、或る意味で現代に通じる先駆者のそれであり、最後の悲劇も時代と性格の犠牲の気がする。更にあの時代が興味深く、周囲の人物が実に興味ふかい。崋山を（体験的批判的に）描くことによつて（勿論作者自身の内なる彼でもあるが）あの天保末年度の全日本の状態を描き、世界のなかの日本の姿を描き、

更に現在及び将来の道を髣髴させ得ると考えるのは、作者の空想であらうか？」(傍点、筆者)

確かに、藤森が「教養小説」として構想した『若き洋學者たち』で誇示したように、こうした「藝術としての肖像畫の手法」は、提供された膨大な史料と聞き書きを駆使した、「忠實に記録に基いて・・・正確詳細な傳記的半面」を作品に付与したであろう。しかし、今井信雄の的確な批評によれば、「作者の崑山にたいする熱烈な傾倒は、その性情、経歴のある類似を崑山に見だしているからである。」<sup>(79)</sup> マルクス主義学者・住谷悦治が「純粋な歴史研究」に仮託しつつ、諸淵に alter ego を見出したように、プロレタリア作家・藤森成吉もまた、天保10年[1839]「蜜社の獄」起り、蟄居自刃する崑山、逃亡自裁する長英、一方奇しくもその天保10年に生を享ける諸淵に、情勢変転の相違はあれ、やはり alter ego を「歴史小説」を以て再現したと言えよう。住谷と藤森にとって、「誤解」とはいえ、諸淵は「近代日本の自画像」に読み込まれた「自己形象」、すなわち自身を投影するいささか歪んだ「鏡」にはかならなかつた。その「鏡」はありうべき自己の、希望や釈明の仮託された「鑑」でもあった。いわばその相似形は、各肖像の構成要素でありながら、同時に返す刀で切り返される批判の指標ともなつたと言えよう。

さて、藤森成吉の諸淵思想の描写は、『若き洋學者たち』(昭和17年刊。)の次の一節に認められるのみである。<sup>(80)</sup> 佃島出獄放免後、宇和島藩に招聘された暖日月の間に、諸淵が勤王家・晦巖和尚まいこんと昵懇となつて交わした談義が寸描されている。出典は不明である。「英蘭學稽古場」で英語を教授した諸淵は、傑僧と言うべき、宇和島金剛山の安国山吉定寺の老和尚と深く交わっていた。当時70歳に及ぶ老漢は禪師でありながら、京都で皇事に奔走した勤王僧でもあった。藤森はいわば虻、この「やかまし屋でひびいた」和製ソクラテスから、プラトンの言う不立文字さながらの謎めいた「知の飛び火」を授かる諸淵アリストテレスとの交流を描いている。

「・・・周三のはうから訪ねたり和尚のはうから訪ねたり、酒を酌みながら勤王を論じたり、禪學とアリストートルの學説を闘はせたり・・・時には黙々



といつまでも對坐したり・・・奇妙なつきあひかたをしてみた。それも、おのづと周三に禪味的風格を備へさせたのだつた。」

この百尺竿頭に心頭滅却の一步を進める諸淵の「禪味的風格」は、「百學聯環」の万学の祖アリストテレス以上に、むしろ国法に殉じて国外逃亡を拒み、従容として「仰藥就死の刑」（末松謙澄）に就いた、「不知」の人ソクラテスを彷彿とさせずに措かない。藤森も当然、長井石峰の諸淵伝を念頭に置いていたはずである。しかし、長井・諸淵伝にアリストテレスへの言及はない。諸淵は、行動する知性でありながら、狷介孤高、純粋な孤独とも称すべき強靱で硬質な意志に徹して短生涯を捧げた、「大和魂〔平田篤胤〕を失はぬ」「古意」を生きる洋学派であった。<sup>(81)</sup> 住谷が踏襲した長井・諸淵伝の一節――

「〔諸淵は〕『自分はたとひ牢にて死すとも、日本に生れて日本の國法を逃れ日本國を逃れるのは、國に對してすまぬことだ』とて、遂に従容縛についたのである。古聖ソクラテースの故事に顧みて感懷已まざるものがある」。 (傍点、原文。長井『蘭學大家三瀬諸淵先生』、前掲書、195頁。)

「国法に従うことが、正義である」との法治主義は、早くも「明治20年〔1887〕フレデリック・ボルロック／谷信太郎譯「政治學沿革史」（中央學術雜誌47號、27頁。）」で講じられ、「法の支配」以上に当時世上に流布していた觀念である。

「・・・〔ゼノホン（クセノフォン）〕氏に依て報告せられたる「ソクラテス」の物語中〔Memolabilia, 4.6.5〕政治學の萌芽已に存在するを發見せり則ち「ソクラテス」が嘗て「法律なるものは其存する間は之に服従せざるを得ざる者なり其之を變化せらるを得べしとて法律を蔑視する國民は恰も戰陣に臨て平和を得らるべしとて遁走したる兵士に異なるなし」と論したるの一章は、國民忠信同盟の主義を包含せりと云ふて可なるべし」。

江戸期に最も著名な西洋人と言えば、「伊曾保（イソップ）」、「依卜加刺的私（ヒポクラテス）」、「那破烈翁（ナポレオン）」に指を屈するであろう。紀元前五世紀を挟む数百年間の「枢軸の時代」（ヤスパース）に、相互没交渉のまま世界に続出した不世出の知囊天才の一人が、江戸期には洩れた觀のあるソクラテスであった。アテネ・プニクススの丘の麓には、殺風景で粗末な小さな祠が

一つ今に残り、朋友クリトンに国外逃亡を慫慂されながら、ソクラテスが毒盃を仰いで刑死した、その牢獄兼刑場跡と伝えられる。明治初期前後に至るや、この三傑に「瑣格刺底〔ソクラテス〕氏」が加えられ、多種多様な宛字のその人名に「氏」が常套に付されたように、二千年の時空を超えて、市場（アゴラ）で論談風発する現代西洋人さながら、恐妻家で「虻」のように徘徊する老「石工」として受容された。わけても萬国史、西洋史原書の洪水と邦訳の氾濫、西洋学知の学史的関心の浸透に伴ない、人口に膾炙した「シヨコラテス」、「ソクラテス」、「ソクラテス氏」等々を論じて、不可欠の論材たるその従容たる刑死と「不知」論に言及しなかった記事論考はほぼ皆無に近いであろう。しかし、後に住谷の共有するソクラテス観にも、刑死着目の有無に変遷がある。わが国の「西洋哲学史」変遷史では、明治啓蒙期の西周の「三聖（耶蘇、釋迦、孔子）」に対して、清沢満之の「三聖（釋尊、孔子、瑣〔ソクラテス〕氏）」、井上円了が「哲學堂」に祀った「四聖（孔子、釋迦、ソクラテス、カント）」（『通俗講談言文一致哲學早わかり』、明治32年刊。）、和辻哲郎の「世界の四聖（釋迦、孔子、ソクラテス、イエス）」の構想が立てられた。仏教ジャーナリスト・井上円了は就中、ソクラテス尊崇の所以を、「哲學中興の主」、「唯心論者」、人品屈指の「知徳完備の人」に求めている。ソクラテスはその硬質で不動の「不知」論とともに、何よりも神色自若として刑死に就き、悠然として鎮まるその「人」の死生によって、「儒教的理想主義」や「葉隠」武士道の氣風の残滓を受け皿として、決定的に後世の心魂を衝き知識人を虜にしたのである。<sup>(82)</sup> 明治3年諸淵改名時より明治10年卒逝の間、匡底に蔵されたままであった、諸淵のソクラテス論手稿本後篇のトリアーデもまた、『哲學：老子の哲學・ソクラテスの哲學・カントの哲學』であった。

本邦「西洋哲学史」の嚆矢・高野長英「西洋学師ノ説」（佐藤昌介氏仮題。天保6年〔1835〕自筆稿本『聞見漫録・海外學術ノ部』所収、『日本思想大系55』所収、岩波書店、1971年、205頁。）のソクラテス観――

「ソコラーテス」トイフモノアリ。伝来諸説ノ非ヲ刈リ、善ヲ収メ、一家ノ教ヲ立テ、以テ大ニ政教ノ道ヲ開ク。開闢三千五百三十年ノ頃、盛ニ其業ヲ

唱フ。後人、此人ヲ唱シテ、学師ノ父トナス。其行フ所、飲食ノ節ニモ能ク中ヲ主トシ（非常過度ノコトナキヲ云フナリ）、知足ヲ求メズ、物ヲ忍ブヲ専一トセリ。能ク後世ノ龜鑑トナル。其教法モ古哲ノ立ツル所ニ勝ル。其及門ノ学徒、頗ル多シテ、皆大名ヲ揚グ。」

他方、三谷隆正『幸福論』（近藤書店、昭和19年。『三谷隆正全集・第2巻』所収、岩波書店、昭和40年、223-24頁。）のソクラテス観――

「西暦紀元前三九九年の晩春アテネでソクラテスが刑死した。人間の歴史あつて以来、ソクラテスの死ほど堂々たる死を死んだ人間は他にない。法廷に立つての毅然たる弁明、死刑宣告直後の悠々たる直言宏辞。然り余りにも悠々たり、余りにも毅然たるかれの最後は、死して後までかれに対する敵の憎しみを刺戟したのであつた。それほどまでに堂々たる死をかれは死んだ。それはまさしく大なる預言者の死であつた。プラトンの筆になる『クリトン』『ソクラテスの弁明』『パイドン』の三雄篇は、この偉大なる死の前後を活写して靈氣人に迫るものがある。かくも偉大なる死を死に得たるソクラテスは、当然またその生き方に於いて、絶倫なる生を生きぬいた巨人であつた。かれこそは精神界不世出の英雄豪傑、かれの存在そのものが学であり、真理への道であつた。だからかれの哲学と思想とを排撃せんとしたる徒輩が、ソクラテス其人を殺すことによつて其目的を達成し得と信じたのは自然であつた。まことにソクラテス其人が学と真理との活ける化身であつた。/それ故、ソクラテス亡き後、ソクラテスの感化の下に興りし学徒達に共通な目標は、ソクラテスを理解するといふことであつた。」

維新时期以後、戦前における西洋哲学史の「輸入」とその史的源流に立つ「聖哲」ソクラテスの刑死及び、「公的アウトサイダー」としての人間理解は、蚕社の獄で自裁した兵学者・高野長英以降、内村鑑三門下の高弟にして法哲学者・三谷隆正の祖述にその頂点と典型を見ると称して過言でない。「これが・・・僕たちの友、僕たちが知るかぎりでは、同時代の人々の中で、最もすぐれた、しかも最も賢い、最も正しいというべき人の最期でした。」（プラトーン／田中美知太郎・池田美恵訳『ソクラテスの弁明・クリトーン・パイドン』、

新潮文庫、昭和43年、230頁。)もうひとつの400年後の受難、イエスの十字架上の磔刑が高弟ペテロの覚醒と、迫害者パウロのダマスコ途上の劇的な回心を画したように、生の深淵を覗いた衝撃に「とうとう眩暈がして」(Plat.Ep. VII, 325E)、「わたし[プラトン]は、憤懣やるかたなく、当時の悪風からはきっぱり身を引きました。」(ibid, 325A)わが国の後世の西洋哲学史もまたこのプラトンの嘆息と激昂を正統の仲介として、獄中のソクラテスを彷彿させる臨場感ある言行を受容し共有し続けた。伝承文献が「凡庸な」伝記作者クセノフォンでなく、「ヨーロッパ哲学の伝統は、その一連の脚註に過ぎない」(A.N. ホワイトヘッド)とまで喧伝され、後に「脱構築の反哲学」でデリダに逆襲される泰斗プラトンに偏るのは、学問が主に求道、修道、あるいは教養や個性、人格の陶冶と解され、学歴に高度な政治的関与が前提とされる時代には、不可避の制約であったと言えよう。常に歴史と思想に模範と教訓を求め、ファウスト的全知の博覧強記をめざす「もの知り」や科学的・歴史の実証研究の「遊び」を許す相対的な余裕のない時代でもあった。維新期古学堂の国学精神を生きつつ、ソクラテスの「不知」論に共振した三瀬諸淵も、それを解釈する住谷悦治もまた、こうした変転する時代状況と学問主流の渦中を傍流の眼で生きる「アウトサイダー」としての学知と生を敢えて選び取ったように思われる。ただ、「ファシズムに抗して学問の自由を守った」住谷は、戦後の無批判な民主主義擁護の知的風潮の席卷する渦中で、論壇の主流に押し出された。とはいえ、ソクラテスにとってそうであったように、住谷の学問(=哲学)は理論や歴史の博識、「知の技法」以上に、「ただ生きる」のではなく、「よく生きる」求道にほかならなかった。<sup>(83)</sup>一方、天来の著書を耽読していた住谷は、内村鑑三のソクラテス評を知っていたはずである。「内村は、天来に求められて書いた『孔子及孔子教』の序文において、「彼[キリスト]の十字架の下に立ってのみ孔子も釈迦もソクラテスも正当に解することができる」としている。

諸淵のソクラテス手稿後篇「不知論」は、紛れもなく本邦におけるこうした解釈史の端緒に位置している。諸淵と、この孔門十傑中の短命が嘆かれた享年32の顔淵(顔回)が三巴に比定される所以である。「希臘ノ人民」、「學士」、「先

哲」、「聖賢」、「聖哲」、「聖人」、「大儒」、「碩儒」、「大賢」、「大聖」、「大哲學者」等々と形容されるソクラテスへの敬慕が、諸淵の「実学的」手稿ソクラテス前篇を貫くと同時に、「不知論」に軸足の移る「非実学的」手稿後篇にも継承されてゆく。諸淵の「冬の鷹」さながらの究学多産の期待がかけられる孤独が深まり、純化してゆくからである。死に臨み、「あやしからぬはなき」（宣長）世に、啓蒙の和製ソフィストがソクラテスに脱皮し極まる瞬間と言えよう。知者たるソフィストが、多言に語る程に何も語っていない自覚が深まり、「哲学」の初源に遡及して、延じて老子を論じカントをも講じて、世界の不條理と人生の苦患に直面したしなやかな感受性が、ソクラテスの「不知」をわがものとする而今である。単なる「哲学」への学史的関心と書齋派の修養が浸透する一方で、知者が「自分の心に聴く」問題意識的な思想の営みが、毀誉褒貶の多い高野長英が緒に就け、早くも明治初期に諸淵によって達せられたと評すべきであろう。後世がそれを忘れただけであり、西周に注目が集まる所以である。

しからは、洋学派・鷗外の難じた「腐儒」（同「洋學の盛衰を論ず」、明治35年講演）とは一体、誰のことか？

### 3. 註

- (33) 住谷一彦「父を語る一子のみた父の肖像」（住谷一彦・住谷馨編『回想の住谷悦治』所収、私家版、1993年、366、390頁。）水谷三公『ラスキとその仲間 --- 「赤い三十年代」の知識人』、中公叢書、中央公論社、1994年、17頁。）
- (34) 長幸男「闘いつづけた学者、住谷悦治の誠実な生涯 --- [田中秀臣著]『沈黙と抵抗』を読んで」、[藤原書店]機4月号、2002年、12頁。田中秀臣『沈黙と抵抗 --- 評伝住谷悦治』、藤原書店、2001年、11頁。「住谷悦治」（日本科学者会議編『科学者の歩んだ道（下）』所収、水曜社、1982年、3頁。）
- (35) 住谷悦治「三瀬諸淵の研究」（同『あるこころの歴史』所収、同志社大学篠部奨学金出版会、昭和43年、406頁。）「住谷悦治」（日本科学者会議編、同書、35頁。）
- (36) 扇谷弘一「世の不條理と闘う精神」（住谷一彦・住谷馨編、前掲書、116-7頁。）「住谷悦治」（日本科学者会議編、同書、3頁）。田中秀臣『沈黙と抵抗』、前掲書、177-178頁。住谷悦治「マルクスと國際社會主義運動」（大日本學術協會編『思想善導論』所収、（東京）モナス、昭和3年。）深作安文「思想善導について」が巻

頭論文である。「私は思想善導の標的は被善導者をして日本國の實相を知識として知り、信念として信ぜしめる所にあると思ふ。若し彼等に我が帝國に關する徹底した知識と信念とがあるならば、我が國體を變更して他の國體の國家を打建てると言ふことが大なる疑問とならざるを得ない。」(6頁。)住谷論文の他、土田杏村「唯物史觀説の批判」、嘉治隆一「マルクス小傳」、藏原思人「マルクス學説の概要」が掲載されている。住谷は確かに治安維持法違反で検挙され特高の拷問を受けた。しかし、「日本ファシズム」による言論弾圧一色の「冬の時代」観では、割り切れない当時の学問研究・思想の自由の一面が窺える。「大学内で自治があり、非合法運動さえしなければ逮捕されることはない、制約はありつつもマルクス主義研究はできたし、論文の発表も可能だった。住谷は非合法組織とはかかわらないように細心の注意を払っていた。」(本庄豊「一九三〇～三三年の住谷悦治日記—ある知識人の精神の断面」、社会文学 37号、2013年、79頁。)

- (37) 松山高商時代の教え子の学徒出陣に際して、住谷は次の餞の言葉を贈ったという。「こんな無謀な戦争はいつまでも続くはずがない。やがて数年後に敗戦で終わることはまちがいない。・・・特攻隊志願といった死の危険性の大きな誘惑には、決して敗れてはいけぬ。恥をしのんでも生き残らなければならない」と、私のまなこを凝視して静かに、しかし力強く語った。土岐坤「老いて学べば、死して朽ちず」(住谷一彦・住谷馨編、前掲書、115-16頁。)住谷馨「父と共に—その人間性」(同書、400頁。)住谷悦治自身が「冷たい権力と温い友情」を回顧している。
- (38) 「ラーネッド博士はわたくしにとって、この人生において尊敬あふれる自分の血となり、肉となり、わたくしの生命を育ててくれた素晴らしい一人です。」(「住谷悦治」(日本科学者会議編、前掲書、44頁)。「正當ナル經濟學ト眞實ナル博愛主義ニ由ラザルベカラズ、而シテ是等ハ眞正ナル基督教ニアルノミ。」(ラルネッド述/宮川經輝譯・土居通豫編『經濟新論(全4卷)』、第4卷、任天書屋、明治19年[明治24年、第4版]、643頁。)留岡幸助、同志社時報 234號、大正15年。[筆者未見。]長幸男「闘いつづけた学者、住谷悦治の誠実な生涯」、前掲論文、12-13頁。長「“冬の時代”の科学的良心—住谷悦治『ラーネッド博士伝』」、朝日ジャーナル、2月22日号、1974年、58-59頁。キリスト教倫理によって経済学、また社会主義を基礎づける発想を、住谷はラーネッドや大西祝以前に叔父・天来に学んでいた。「神なくば生命なく、生命なくば社会主義は成り立たない。」(天来「迷信と偶像打破(中)」聖化 23号[田中秀臣「沈黙と抵抗」、前掲書、162頁から引用。]社会改良を間接的に信仰と人格陶冶に求める天来の着想は、同じく社会変革を目指す「血盟団」井上日召の「一人一殺主義」が、日蓮宗・法華經による当初の「内面革命」を「社会革命」へと媒介した消息との対比は、組織運動の可否の観点から興味深い。(中島岳志『血盟団事件』、文春文庫、2016年。)なお、

住谷の仕事の成否とは別に、批評は一般に評者の無条件な意欲と努力だけで成立するものでなく、向き合う評者の良心や誠実、力量と対象人物の器量の大小との間に相互規定の条件が必要となる。鷗外が晩年の史伝物を告白文学化し得なかったとする林達夫の分析は、住谷とは逆の事例の指摘である。林達夫「自己を語らなかつた鷗外」(『林達夫著作集・第4巻』所収、平凡社、1971年、271頁。)

- (39) 住谷一彦「父を語る」(住谷一彦・住谷馨編、前掲書、366-67頁。)
- (40) ソクラテスに言及のある、住谷天來「窮思録」、聖書之研究10巻12號、明治39年、及びプラトンを批評した、同「プレトー「レパブリック」、基督教新聞1361號(10月7日付)、明治42年、などが知られる。「天來の思想の中核をなすものは、孔子批判と非戦の思想である……。両者は相俟って既存の体制や日本の伝統的な価値観に対する批判として鋭いものがあつた。」(田中秀臣「第8章叔父住谷天來の死」[同「沈黙と抵抗」、前掲書。]なお、内村のソクラテス評についても、田中、同書、156頁。[筆者未見。])
- (41) 内村は晩年の天來宛書簡で「東洋倫理の素養なくしてクリスチャンに成るの危険を近頃切実に感じます。聖書文けでは人は救はれません。其御つもりで御勉勵を願ひます」[大正4年(1929)10月18日付]と認めている。(『内村鑑三全集・第39巻』所収、岩波書店、2002年、462頁。)
- (42) 住谷悦治『河上肇』、人物叢書85、吉川弘文館、昭和37年、257頁以下、321頁。田中秀臣『沈黙と抵抗』、前掲書、11頁。
- (43) 住谷悦治「社会科学的真理と宗教的真理との統一—河上肇博士の精神構造」、同志社大學人文學研究所紀要5号、昭和37年。住谷一彦「[宗教的真理]と[科学的真理]の相関—河上肇における生と死の葛藤と「救いの確かさ」の思想」(同「河上肇研究」所収、未來社、1992年、274-75頁。住谷一彦は父に代わって、この「謎」の論理的解釈の一方法として、ウェーバーの予定説と世俗内禁欲の論理の援用を試みている。
- (44) 田中秀臣『沈黙と抵抗』、前掲書、236-37頁。
- (45) 住谷一彦「まえがき」(住谷一彦・住谷馨編、前掲書、1頁。)
- (46) 「私[住谷]は、横暴きわまりない国家権力の末端とその手先によって、このようなひどい拷問を受け、生きる糧の道さえもとどざされることになったのです」。「住谷悦治」(日本科学者会議編、前掲書、30頁。拷問の仔細については、同書、28-30頁。本庄豊、前掲論文、81頁。また、絲屋寿雄「風雪の時代の住谷先生」(住谷一彦・住谷馨編、同書、304-07頁、にも詳しい。
- (47) 田中秀臣『沈黙と抵抗』、前掲書、10頁。
- (48) 本庄豊、前掲論文、82頁。しかし、住谷自身の公表した回想はいささか異なっている。「太平洋で戦争がはじまって間もなく、私は[楽園]松山を去らねばな

らなかった。昭和十七年三月、四国を離れ宇品行きの船の中で、読んだ新聞に、真珠湾攻撃の海軍特攻隊九名の大きな肖像写真が載っていたのが、きわめて印象的であった。そして、当時の、そのような世の動きから、隅っこの方へ踏みこじられた雑草のように払いのけられた自分のみすぼらしい姿に、しみじみ「ものあわれ」を感じたのであった。」(住谷悦治『研究室うちそと』、217頁。田中秀臣「戦時下の松山高商と住谷悦治博士」、上武大学商学部紀要11巻1号、1999年、29-30頁、より引用。)住谷は同じ場面を別に次のように回想してもいる。「……船の中で見かけた新聞は最大号の活字で戦勝々々を報じていたのが印象的でした。……昭和二十年八月十五日まで、心身ともに休まる晴天白日を仰ぐことはなかったのです。八月十五日の天皇のラジオ放送に多くの日本人は大地に頭をすりつけて不忠をお詫びしたそうですが、わたくしはほんとうのところ、戦争に敗れ無条件降伏によって日本の将来と新しい日本の生まれるために喜んだのでした。それは大きくは日本の社会のため、小さくは家族と自分の生きてゆく道のためであったわけです。」(住谷悦治(日本科学者会議編、前掲書、36頁。))

- (49) 戸坂潤「『文献学』的哲学の批判」(同『日本イデオロギー論』、岩波文庫、岩波書店、1977年、48頁。[白楊社版、1935年、初出。])「墮落した自己へのひきこもり」については、ヘーゲル/長谷川宏訳『歴史哲学講義(下)』、岩波文庫、1994年、97頁。「住谷悦治」(日本科学者会議編、同書、35頁。)戸坂実際の住谷評は、「氏は経済学説史の研究者で、多分キリスト教的教養を身につけた人のように思われる。平凡に批評すれば温厚な学徒(傍点、筆者)である。(戸坂潤「教授免職列伝」(『戸坂潤全集・別巻』所収、勁草書房、1979年。))なお、田中美知太郎「回想の戸坂潤(または「戸坂潤と私」)」(三一書房編集部編『回想の戸坂潤』所収、三一書房、昭和23年。))

- (50) 住谷悦治「井蛙脱皮のエスペラント」、前掲論文、117頁。「わたくしがはじめて三瀬周三の名を知ったのは、昭和六年のころわが国の経済史学界の「封建論争」と「マニファクチュア論争」とが活発に論壇を賑かしておったところで……大正六年版の「高島嘉右衛門自叙伝」を古書店に漁り探し求め、これを耽読したのが三瀬周三についての最初の自覚的な出会いであった」。(同論文、120頁。)同「三瀬諸淵の研究」、前掲論文、413頁。

- (51) 住谷悦治「三瀬諸淵の研究」、同論文、418頁。同「井蛙脱皮のエスペラント」、同論文、123-24頁、同「明治文化と三瀬諸淵先生」、(松山高商文藝部)校友會誌15號、昭和12年、大津「三瀬諸淵—蘭医シーボルトの高弟獄中より獄制改善を献言」、前掲論文、29頁。映画化の企画については、次の記事文献がある。「三瀬諸淵先生の波瀾に富む一代記、劇とシネマで全国に普及、小玉吞象翁事績調査」愛媛新聞3月31日付、昭和5年。作道洋太郎「学灯の残照」(住谷一彦・住谷馨



編、前掲書。)

- (52) 岡光夫「住谷先生の思い出」(住谷一彦・住谷馨編、同書、129頁。)住谷悦治『蘭醫三瀬諸淵傳』、前掲書、50頁。資料博搜で知られる吉村昭は出獄時の諸淵を、小説家の想像力で補いつつ、こう描写している。禅僧海巖やソクラテスへの言及はまったくない。「伊篤 [イネ] は男に視線を据えた。周三とは思えなかった。顔がどす黒く、頬骨が突き出ている。明るい表情を絶やさなかった周三の面影は、そこにはなかった。深くくぼんだ眼窩の奥の眼には、刺すような光がうかんでいる。痩せた顔や手足に、発疹の痕が青黒く散っていた。・・・獄に投じられた周三の苦しみにみちた日々がその容貌に強く感じられた。きびしい苦役が周三の顔を一変させ、明るい表情もうばったらしい。・・・たしかに周三はすっかり変貌していて、十三歳のタカ [高、イネの娘、シーボルトの孫娘、周三の許婚] が恐しいと思うのも無理はなかった。顔は險悪で、両手の指と爪の色が不気味であった。[獄中で煎役を務めていたため]」(『ふぉん・しいほととの娘 (下)』、新潮文庫、平成5年、532-34頁。初刊は、上下2巻、毎日新聞社、1978年。)この小説は英訳された。Akira Yoshimura (trans. by Rubinger), *Siebold's daughter*, Merwin Asia, 2016. また、一度舞台演劇化もされている。本田英郎劇化：川池文司演出、「ふぉん・しいほととの娘」編集委員会編、東京芸術座公演・第59回、1985年。なお、H. Beukers, *The Mission of Hippocrates in Japan : the contribution of Philipp Franz von Siebold*, N.V. Organon, 1977. がある。
- (53) 住谷悦治「尊皇開國主義の政治的性格—蘭醫・三瀬諸淵への一考察」(松山高商商経研究會)松山高商論集4號、昭和16年、66頁。)同「三瀬諸淵の研究」、前掲論文、419頁。同「井蛙脱皮のエスペラント」、前掲論文、125頁。秋山英一「第49章—三瀬諸淵の勤皇」(同『近代日本の夜明け：伊予勤皇史』、近代日本の夜明け刊行会、1968年。)参照。「諸淵備忘録」(和綴37枚)及び「略年譜」(自書。慶應元年 [1865] 初夏、小冊子。)には、次のようにある。「嘉永二年 [1849] 巴西四月母ニ後レ五月父歿ス亦後義兄ノ宅ニ寓居シ學業ヲ研精ス 同五年 [1852] 壬子初メテ常磐井巖弑先生ニ遇シ親シク我神道ノ講説ヲ聽キ旁ヲ和歌ノ點刷ヲ乞フ 余從來心性不敏ナルモ此師ヲ得テ志ヲ立テタリ 安政元年 [1854] 甲寅十一月地震ニ逢ヒ患苦ヲ受ク 同二年 [1855] 乙卯春正月常磐井先生ノ意ニ從ヒ亞父二宮[敬作]翁ノ許ニ到リ業ヲ受ク 亞父余ガ志ヲ受シテ教諭甚ダ親切ナリ」。長井『蘭學大家三瀬諸淵先生』、前掲書、1頁。住谷悦治「井蛙脱皮のエスペラント」、前掲論文、125頁。同『蘭醫三瀬諸淵傳』、前掲書、49-65頁。同「三瀬諸淵の研究」、同論文、450-60頁。住谷説に同意する論文には、貴司山治「幕末の國學者・科學者」(大洲史談會) 温古5號、昭和16年、がある。それに対する批判は、三好「三瀬周三」、前掲論文、106頁。なお、住谷は「周三の人格とその思想の形成に深

く影響を及ぼしたであらうと思はれる人人」として、常磐井巖弉、二宮敬作の他、「大村益次郎、晦巖和尚（これは宇和島金剛山の安國山吉定寺という隠居寺の老和尚で、周三は〔佃島〕出獄後この傑僧と深く交つてゐた。禪師ではあるが京都で王事に活躍した勤王僧である。）及びシーボルト」を挙げている。

- (54) 住谷悦治『蘭醫三瀬諸淵傳』、同書、4-5頁、50-51頁。同「三瀬諸淵の研究」、同論文、427頁、450頁。「古聖ソクラテースの故事に顧みて感懐已まざるものがある」（長井『蘭學大家三瀬諸淵先生』、同書、195頁、450頁。）が踏襲されている。戦後、住谷は「国家による」ソクラテースの刑死を知識として知った経緯を、次のように回顧している。「・・・近代国家に生を享けたわたくしが、国家による死刑執行を最初にしたのは、今から五十九年前、中学一年生のとき新聞で読んだいわゆる「大逆事件」・・・の死刑の記事であった。・・・その後わたくしはローマ時代にイエスが十字架の上に刑死したことや古くギリシャ時代にソクラテースが毒杯を飲まされことを知った。イエスの刑死はキリスト教をますます普及させる結果となった。大学生のころ〔昭和10年頃〕、ようやくソクラテースがその運命的・不可抗的な刑死を主体的に把握することによって、「死して生くるの道」を教えたことを知った。ソクラテースの弟子たちが足許にとりすがって泣いて脱走を勧めたがソクラテースはそれに応じないで、かえって弟子たちに「死」の意味を説いたという話に胸をつまらせたことである。」（住谷悦治「〔死刑〕雑感」（同『鶏助の籠』所収、中央大學出版部、1970年、236頁。〔京都新聞〕昭和45年1月31日付、初出。〕
- (55) 三好「三瀬諸淵」、前掲論文、106頁。戦後、住谷はこうした批判を予想したかのように、周到に釈明している。「三瀬周三が當時において自らかかる立場を理論的に理解したとか、自覚していたとかという問題でではなく、彼の生活・行動・思想が客觀的にその類型に入るということである。」（住谷悦治「明治初期移入經濟思想の一断面」、同志社大學經濟學論叢4巻2號、1952年、56頁。）
- (56) 貴司、前掲論文、19頁。
- (57) 貴司、同論文、23頁。住谷悦治「尊皇開國主義の政治的性格」、前掲論文、72-73頁、参照。
- (58) 高島善哉・水田洋・平田清明『社会思想史概論』、岩波書店、1962年、381頁。
- (59) 石井文康『良心論—その哲学的試み』、名古屋大学出版会、2001年、1頁。
- (60) 住谷悦治『蘭醫三瀬諸淵傳』、前掲書、5頁。
- (61) 住谷悦治「三瀬諸淵の研究」、前掲論文、440、442、447、452、453、459頁。同論文より枝葉を切り落として成った内容簡素の小冊子伝記・住谷『蘭醫三瀬諸淵傳』、前掲書、26、29、45、52、54、64頁。安永悟郎『馬場辰猪』、前掲書、107頁。住谷の描く、諸淵の「中間的思想を懐く政治的變革の實踐から遊離して

る良心的知識人の不可避的な歴史的運命」に、「時局」に「良心的」に呻吟する住谷の置かれた状況を重ね合わせる評価は、田中秀臣『沈黙と抵抗』、前掲書、132-33頁。ただ、田中はむしろ住谷の「抵抗」を評価している。「〔住谷の〕松山時代の著作に共通するのは特徴は、「時局」の制限からほとんど現状批判すら言えなかった時代に、住谷はこれらの著作で日本の精神上の傲りの危険性を示唆していることである。これは当時の言論統制の状況で許されるぎりぎりの発言であったろう。」(田中「戦時下の松山高商と住谷悦治博士」、前掲論文、23頁。)田中秀臣『住谷悦治小伝』、学文館法人本部財務印刷課、1998年、38頁。

- (62) 土岐坤「老いて学べば、死して朽ちず」(住谷一彦・住谷馨編、前掲書、116頁。) 建前と異なる、住谷の反戦・平和主義の言動については、本号註(37)、(48)、参照。
- (63) 曰く付きの同書刊行の仔細については、住谷一彦「父を語る」(住谷一彦・住谷馨編、同書、390-91頁。) 共通論調でありながら、諸淵信が住谷の「生き甲斐といえるほど」傾倒した研究である一方、『大東亜共栄圏植民地論』は「偽装」の書と言うほかはない。松山高商校長・田中忠夫が、再び当局の忌諱に触れる筆禍事件に巻き込まれかねない冤罪の窮状から、住谷を弁護し救うための窮余の一策として執筆を勧めたという。冤罪の事情については、「住谷悦治」(日本科学者会議編、前掲書、35-6頁。) 子安宣邦『「近代の超克」とは何か』、青土社、2008年、121-22頁。神山睦美「小林秀雄と「近代の超克」--- 太平洋戦争下の文学思想状況とその意義」、アジア太平洋レビュー6号、2009年。)
- (64) 田中秀臣『沈黙と抵抗』、前掲書、134、143頁。「ある意味で書き手のやる気のなささえも感じる内容であり、唯一、住谷の主張らしいのは、ここでも一貫した極端なナショナリズムへの批判」(傍点、筆者。田中、同書、264-65頁。)とある。
- (65) 例えば、その一端は、特集「戦争詠を読む」短歌研究64巻8号、2007年、参照。また、昭和17年7月に開催の、大東亜戦争肯定の「世界史的立場と日本」を論じるシンポジウム「知的協力会議」の記録は、同年、雑誌「文學界」9月、10月號に掲載された。パネラーの京都学派の哲学者たちと、「日本浪漫派」及び「文學界」同人の諸論文は、単行本『近代の超克』、創元社、昭和18年、に収録された。また、栄沢幸二「第5章 知識人と思想戦」(同『大東亜共栄圏』の思想)、講談社現代新書、講談社、1995年。) 参照。三谷正隆を批判した南原繁の、高村光太郎のような自己批判は、寡聞にして聞かない。住谷悦治についても同様である。しかし、戦後、貴族院における日本国憲法草案審議の際、南原が「山吹憲法」の「空想的平和主義」の非現実性を指摘したゆえか、後の全面講和論で「曲学阿世」の批判を浴びたことは、よく知られている。
- (66) 竹内洋『革新幻想の戦後史』、中央公論社、2011年。

- (67) 山田宗陸『危険な思想家—戦後民主主義を否定する人々』、カッパブックス、光文社、昭和40年、3頁。竹山道雄、天野貞祐、林房雄、三島由紀夫、石原慎太郎、江藤淳、高坂正堯、山岡荘八、大熊信行の9人が指弾されている。江藤淳と高坂正堯は、当初の林健太郎、福田恆存の予定から急遽変更された標的だという。猛烈な反撃と冷笑を以て報われた山田は、後年、自ら絶版とした同書を「恥ずかしい本」と述懐している。(1989年10月27日付、朝日新聞夕刊。) 呉智英・坪内祐三「福田恆存から断筆・筒井康隆までの戦後論壇の50人・50冊」、諸君11月号、1997年、は同書を代表的戦後論50冊の1冊に数えている。
- (68) 村松剛「危険な思想家山田宗陸」新潮62巻6号、1965年、2頁。呉智英『危険な思想家』、メディア・ワークス、1998年、8-9頁から引用。
- (69) 水谷三公『ラスキとその仲間』、前掲書、17頁。竹山道雄「新ソフィスト時代」、思想184号、昭和12年。なお、原理日本社に関わって、「超克」すべき西欧の「特殊主義」中心に反発し、辺境から「日本主義」の学問的構築を提唱した、忘れられた研究がある。松田福松の英語学、赤松良讓の日本主義社会学などが指摘されている。(竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代—大学批判の古層』、柏書房、2006年。) 早く「日本精神」の哲学的論理化に努めたものに、紀平正美『日本精神』、岩波書店、昭和5年、がある。同じく「日本主義」の「国民科学」、民族的社会学の構築を提唱し、戦後無視されたものに、「日本回帰」した高田保馬、小山栄三、小松堅太郎等の民族論があり、ウェーバー「没価値性論」の「学問のための学問」、その「非実践的」観照的純粹理論の超克を目指し、「祖先の精神に生き」「民族の光榮と國家の繁榮のための学問」構築を提唱した、湯村榮一『民族的世界観の研究』(新明正道他序文)、慶應書房、昭和17年、も逸することができる。福間良明「『民族社会学』のナショナリティ—高田保馬、小山栄三の民族認識を手がかりにして」、ソシオロジ47巻3号、2002年、参照。三木清の紹介が先行するが、「日々のザッへに仕える」「没価値性論」を邦訳(『職業としての学問』、岩波書店、昭和11年。)して、戦後変節が隠蔽された「民族社会学」に関与した尾高邦雄の評価については、三笠利幸「『没価値性』から『職業社会学』へ—尾高邦雄のヴェーバー受容をめぐる—」、現代思想35巻15号、2007年、同「福武直と Wertfreiheit の意味：科学と実践のはざままで」、教養研究14巻2・3号、2008年、川合隆男・吉村治正「社会学史関係資料 尾高邦雄の著作目録」、法學研究68巻7号、1995年。戦前戦後のウェーバー研究の受容と展開については、ヴォルフガング・シュヴェントカー／野口雅弘・鈴木直・細井保・木村裕之共訳『マックス・ヴェーバーの日本』(『業績の発見1926-1945』、「日本の「第二の開国」期におけるマックス・ヴェーバー研究1945-1965」)、前掲訳書、参照。
- (70) 林達夫はこう回想している。「あの戦争そのものについても私は一般とは少しく

別な解釈をもつ人間であるが、そして私は決してその戦争を是認しているわけではないが、しかし戦争に敗れるということの暗い恐ろしさを、世界史の生きた先例の数々は私に前以て教えてくれていた。だから勝目のあるとも思われぬあの戦争に、それかといって事もなげに人々の言ったようにおれそれと負けることにも、私は堪えられない理不尽な思いに駆られていたのである。私はあの八月十五日全面降伏の報をきいたとき、文字通り滂沱として涙をとどめ得なかった。わが身のどこにそんなにもたくさんの涙がひそんでいるかと思われるほど、あとからあとから涙がこぼれ落ちた。恐らくそれまでの半生に私の流した涙の全量にも匹敵する量であったであろう。複雑な、しかも単純な遣り場のない無念さであった。私の心は日本の全過去と全未来とをありありと見てとってしまったのである。「日本よ、さらば」、それが私の感慨であり、心の心棒がそのとき音もなく真二つに折れてしまった。嫌悪に充ち満ちた古い日本ではあったが、さてこれが永遠の訣別となると、惻隱の情のやみ難きもののあることは、コスモポリタンの我ながら驚いた人情の自然である。何かいたわってやりたいような心ののこる気持ちで、私はその日その日をおくっていたが、かかる心に映るぎすぎすとうわずった、跳ね上がった言論の横行しはじめたことがどんなにやり切れなかったことだろう。また二の舞いかと心は沈むいっぽうであった・・・、「この Occupied 抜きの Japan 論議ほど間の抜けた、ふざけたものはない」。(林達夫「新しき幕開き」(『林達夫著作集 5』所収、平凡社、1971年、261-64頁。)唯一、林達夫の心に沁みしたのは、「美しい日本」について「声低く語る」川端康成の言葉だったという。「あのうそのような軽さこそ、人民の指導的立場にある知識階級の政治的失格を雄弁に語る」。戦後民主主義の原点とも言うべき「八月革命説」にも、「寵児」丸山眞男にも、一切触れていないのは、興味深い。熊谷英人「笑うエビキュリアン—林達夫における政治」、明治学院大学法学研究 100号、2016年。

- (71) 高島善哉他、前掲書、380頁。高島氏は、半世紀ほど前の講演会后、懇談会で学生だった筆者の「後ろ向きの進歩主義者」の意味を尋ねた質問に答えて穏やかに、惜しむらくは丸山さんは天才でなく、大秀才以上ではなかったということです、とずれた返答をされた記憶が残っている。
- (72) 丸山眞男『後衛の位置から：『現代政治の思想と行動』追遺』、未来社、1982年、127-8頁。
- (73) 坂口安吾「日本精神」(『坂口安吾全集・第2巻』所収、筑摩書房、1999年、176頁)。
- (74) 長谷川三千子「からごころ」(同『からごころ—日本精神の逆説』所収、文春文庫、2014年、23頁)。
- (75) 住谷悦治『蘭醫三瀬諸淵傳』、前掲書、4、52、65頁。

- (76) 出隆「唯物論者になるまで—1948.10.9. 明大講堂における講演」、唯物論研究 5 号、1949 年。飯島宗享「出隆における含羞と哲學」、理想 333 号、1961 年。
- (77) 木村毅「藤森成吉の人と作品」(『現代日本文学全集 77—前田河廣一郎・藤森成吉・徳永直・村山知義集』所収、筑摩書房、昭和 32 年、403-5 頁。)
- (78) 藤森成吉『渡邊崋山』、改造社、昭和 10 年、「序」。藤森岳夫『たぎつ瀬—作家藤森成吉略伝』、中央公論事業出版部、1986 年、116 頁より引用。戦後、藤森は渡邊崋山と高野長英を主題とする評伝『近代日本の先駆者たち—幕末の洋学』(新日本新書 148、新日本出版、昭和 47 年)を著し、「崋山研究の資料は全部所有しているが、高野長英に関しては後裔高野長運翁の『高野長英傳』をたびたび参照した」(同書、4 頁)と、明かしている。確かに『藤森成吉文庫目録』(神奈川文学振興会編、神奈川文学振興会、1990 年。)には夥しい崋山・長英関係文献が記録されている。しかし、本書では脇役を振られた諸淵の事績は、従来の諸淵伝の粗描にすぎない。なお、藤森の諸淵関係の膨大な史料の扱いについては、本稿註(9)、参照。
- (79) 今井信雄「藤森成吉」(日本近代文学館編『日本近代文学大辞典・第 3 巻』所収、講談社、昭和 52 年、178 頁。)
- (80) 藤森『若き洋学者たち』、前掲書、337 頁。「禪學とアリストートルの學說」の問答を裏付ける文献上の典拠記事は、不明。藤森の常套的な考証癖については、本稿註(9)、参照。「現代作家の第一人者、藤森成吉氏は昨十一月より、化學者、三瀬周三を雑誌「科學ペン」に執筆中の處、突如、十二月に來洲せられ、諸淵の遺品、遺跡等を調査、研究し、二泊の後、歸京せられ、その結果を美しい文筆で連載せられてゐる。何れ完結後は單行本となつて發行せられるので諸賢の御購買を御願致します。・・・茲に大洲と關係の深い藤森、貴司の兩氏が二大新聞に麗筆を振つてゐられるのも奇縁と云ふべきであらう。」(温古編集部後記、貴司山治「幕末の國學者・洋學者」、前掲論文、25 頁。)藤森は執筆に当たって、諸淵の遺稿や資料を東京に借り出したわけではなく、この大洲「二泊」の間に閲覧したと思われる。住谷の他、いずれも戦前のプロレタリア作家が幕末維新史の「洋学派」に関心を向け、諸著を公刊しているのは、興味深い。貴司には、小説『維新前夜』(春陽堂書店、昭和 17 年。『新編維新前夜(巻 1-3)』、大衆文学名作全集・第 6-8 巻、春陽堂書店、昭和 31 年刊。)、大佛次郎他著/貴司編『勤王史蹟行脚』(鶴書房、昭和 19 年。)がある。一方、「義理と人情」の庶民性に徹した「股旅物」の作家・長谷川伸(三谷隆正の異父兄)は幕末史料を博搜して、官製明治維新史に異議を唱え、冤罪の汚名にまみれた『相樂總三とその同志』(昭和 18 年刊。)を始めとする、「歴史の流れに押し潰された」無名戦士の史実を発掘する「紙碑」に傾倒した。藤森や貴司と異なって、自画像を仮託したわけではない。余命があれば、

前原一誠や奥平謙輔を扱ったかも知れない。なお、戦後、同じく「世界史における幕末・明治維新」を主題材として、やはりプロレタリア作家とは異質の関心から、幕府の瓦解と政変に変転する「近代日本の自画像」を描いた近年の史劇物として、吉村昭の小説群がある。戦史小説から歴史文学へと昇華し、史実の実証に徹した「痛みに嘘をつかない」、「史実を歪めない」と評される諸作である。戦災を生き延び、「十代で結核に罹患し、治療のため局所麻酔のみで肋骨を五本除去するオペを受け、想像を絶する苦痛を経験した過去。それに、幼い頃から繰り返し接してきた肉親との堪えがたい死別の過去が絡み合い・・・吉村文学における「死」及び「死」に類する事柄の表現は圧倒的かつ確なのである。」(文藝春秋編『吉村昭の伝えたかったこと』、文春文庫、2013年、308-9頁。)『日本医家伝』[前野蘭化]、講談社、1971年、『冬の鷹』[前野蘭化]、毎日新聞社、1974年、しかし諸淵の刑死のソクラテス手稿に一言も触れない『ふおん・しいほるとの娘(上下)』、毎日新聞社、1978年、『西洋学師ノ説』にも言及しない『長英逃亡(上下)』、毎日新聞社、1984年、『白い航跡』[高木兼寛]、講談社、1991年、『彦九郎山河』、文藝春秋、1995年、『夜明けの雷鳴：医師高松凌雲』、文藝春秋、2000年、『暁の旅人』[松本良順]、講談社、2005年、等がある。贅言すれば、プロレタリア文学からプロレタリア運動喧伝を除くと、広汎な題材の恐るべき娯楽小説が残ると、小林多喜二は無論、忘れられた貴司山治をも論じた小著がある。荒俣宏『プロレタリア文学はものすごい』(平凡社新書、平凡社、2000年。)

- (81) 「彼〔諸淵〕は後年シーボルトに就いて、蘭學を修め、當時勝れた洋學者として、世に立つに當つても、飽くまで大和心を失はず、常に君と國とを念となし・・・毎に忠愛の赤誠を披瀝した所以のものは、一に此常磐井塾に於ける人格の感化、及國學的素養が、堅く其因を成したのであつて、實に少年期の基礎的教育が、如何に生涯に影響するかを如實に物語つてゐる」。また、開國派の諸淵は、攘夷派水戸浪士の襲撃に備えて、文久元年〔1861〕、辞世を添えた遺書を認めていた。時に、諸淵23歳。長井のその略解。「自分は常に横文字を読んで居り、且外國人の内に居る身であるから、このまゝ討死でもすれば世間の人は、あいつは、外國人の奴隷だ、外國人の同志だ、など、思はれるのであらうと思ふとくやしい。が、しかしほんとうに私の心を知つて呉れる人は、彼は外國人と一緒に死んだけれども、元來彼は大和魂は失はぬ、外國人と一緒に血を流したが、櫻の花が、から紅の花と一緒に散つたのだ、一緒に散つても日本の櫻は、矢張立派な櫻じやと思ふて呉れるだらう。」(長井『蘭學大家三瀬諸淵先生』、前掲書、48、77頁。)[「古聖ソクラテス」については、長井、同書、195頁、参照。
- (82) 池田勇太『維新変革と儒教的理想主義』、山川出版社、2013年。武士道については、内村鑑三のキリスト教受容と武士道との関係が言われるように、ソクラテ

スに限らず、大西祝には直接ストア哲学に関する論考がある。同「ストアの學と武士道及我國民の氣風」、埼玉教育雜誌 146 號、明治 28 年。同「ストアの精神と武士の氣質を比較して我國民の氣質に及ぶ」、(六合雜誌) 日本宗教 1 卷 6 號、明治 28 年。同「ストアの精神と武士の氣風を比較して我が國民の氣質に論じ及ぶ」、宗教 48 號、明治 28 年。

- (83) 住谷悦治「『死刑』雜感」(同『鷄助の籠』、前掲書、236 頁。) 本号註 (54)、参照。住谷は既に旧制二高の学生時代に「四つの宿」演説で、ソクラテスに触れている。「ソクラテスが語るように「汝自身を知れ」ということを悟ったとしても、単にそれだけであって魂の平安は得られない。むしろ逆に煩悶の種が増えるかもしれない。」田中秀臣『沈黙と抵抗』、前掲書、30、156 頁。住谷一彦「父を語る」(住谷一彦・住谷馨編、前掲書、368-69 頁。)

[\* 正誤表]

	(誤)	(正)
1 頁「目次」中 5. ソクラテス論前篇手稿 (2)		→ 5. ソクラテス論後篇手稿 (2)
26 頁 21-22 行 爾後「封建制度は親の仇・・・」		→ 爾後「封建門閥は親の仇・・・」

[\* 補正分]

39 頁 14-15 行 古人曰く、「賢を行はんとして、自ら賢とするの心を去らば、いづくぞ往きて美ならざらんや。」→ 末尾に出典文献を補正。「(『韓非子』説林上)」

[\* 文献追加]

32 頁末行「西洋政治経済学史研究文献」追加分

・明治 16 年 (1883) ゼームズ・ウィリアム・ギルバート原著 / 金谷治譯述『古代商業史』(經濟雜誌社 [發兌]、經濟學講習會 [出版]。)[\* 筆者註—西洋史研究上の經濟学、經濟史及び經濟思想の源流を古代希臘に遡る学史的関心喚起の嚆矢となった訳述書。翌明治 17-18 年、コッサー / 中川恒次郎譯「太古及中世理財學沿革史 (前・承前)」學術經濟雜誌 1, 2 號を手始めに、古典古代から記述する西洋經濟史・經濟学史研究が続々と上梓される。]